AZ
653
E 1

0055786000

0055786-000

AZ－653－E1

極東平和と日本陸軍

恢弘会・著

兵林館

1931. 1

AJB

國民必讀 極東平和と日本陸軍

恢弘會著

AZ
653
E 1

國民必讀

極東平和と日本陸軍

恢弘會 著

東京 兵林館 發行

AZ
653
E1

序

兵は凶器にして戰は惡德なり、妄に用ふ可ちず、徒に作す可らずとは千古を通ずる中外兵家の戒であるが、古來政治家のより大なる凶望と惡德とに亂用されて寧ろ平和攪亂の走狗となつて居た。氣流の均衡が平穩の日和を齎らす自然の原理を痛感せる世界幾多の弱小國が其軍備に貧乏の國力を賭して强大國の軍備に頡頏せんと努めたのも、此凶望惡德の來襲に備ふる爲であつた。一二の强大國に依りて軍備の均衡を否定せらるゝ現代世界には、未だ平和の曙光だも見出し得ぬのである。國際平和の保障には、小人數の相談が纏まり易いやうに。國際折衝の單位を少數ならしむるを必要とする。國際聯盟が民族自決を高調して、戰前の國際單位を幾多の小國家に分割せしめたのは、强大國の凶望達成には無上の便益を與へて居るが、平和保障に對しては寧ろ係爭事件を滋くして、却て不安の危機を多からしめて居る。先見なき政治家の民族自決が、新に幾百千里の國境を延張し、列强の不平等軍縮の强要を裏切りて、却て軍擴の結果を齎らし居れる皮肉の現勢を如何に觀ずるか。戰後幾回となく開催された聯盟理

國立國會
6.8.26
圖書館藏書
94W47307

四　太平洋の危機……四七
第三章　軍備決定の基礎要件……五五
一　國是國策……五五
二　國防方針及地理的關係……六一
三　軍備と經濟……六九
四　常備兵額と戰時所要の兵力……七四
第四章　陸軍常備兵數及陸軍費の列國比較觀察……七八
一　各國の常備兵力……七八
二　國費國富及國民所得と陸軍費との關係……八三
三　國費總額と陸軍費の關係及其增減の觀察……八八
第五章　我陸軍の缺陷と充實問題……九四
一　現有師團の本質……九四
二　陸軍の編制裝備……九八

三　陸軍の充實難……一〇三
四　軍事費搾取主義と軍制改革の要領……一〇六
五　陸軍の現代化と軍縮の危險性……一〇八
第六章　山本条太郎氏の國防經濟化論を駁す……一一四
一　軍部軍隊軍人の任務に關する誤解……一一四
二　獨逸敗戰の原因に對する誤觀察……一一七
三　平時極小戰時極大の空想論……一二一
四　在營年限短縮論の誤謬……一二五
五　百姓一揆式軍備論……一二九
六　無勘定なる青年訓練論……一三四
七　外交の神聖視と全國軍人に對する侮辱……一三七
第七章　結　論……一四〇
一　軍縮論の無責任……一四〇

二　國民の覺悟と奮起……一四四
附表　帝國及列强の陸軍々費に關する參考表

目次終

必讀民國

極東平和と日本陸軍

第一章　平和論の檢討

一　平和運動の由來と宣傳

我國の政界及言論界に於て列强軍備の現勢と國際變局の不安を輕視し只管軍備の一大縮小を論議せらるゝは、其の議論の結構に於て固より種々の相違ありと雖も、窮極する所平和愛好の餘り、自己催眠に陷り戰爭は起り得ないものだと盲信するからである。斯の思想の旺盛を極むる所以は近代世界各國に平和論が勃興し四方に對して大々的宣傳が行はるゝに因る故に平和論の如何なるものであるかを檢討することが、軍備縮小問題を討究する爲め、最も緊要なる前提であらねばならぬ。

斯の平和思想には種々複雜錯綜せる動機が潛んでゐるけれども、其の根柢を形造るものは社會主義的國際平和思想帝國主義の反動たる平和思想、及歐米强國の自己擁護

宣傳の三者である。之に就て簡單に所見を述べて見よう。一八四八年プラッセル共產黨協會は有名なる共產黨宣言なる冊子を發表した、其中に曰く

勞働者は其解放を求むる焦燥に於て、愛國心の爲め目的の達成を妨げらるゝことがあつてはならない。プロレタリヤは唯誕生の地のみがあり國家を有しない、總ての社會主義者は國籍の如何を問はず僚友である。故に假令戰時と雖も階級觀念は國家的觀念に先立たねばならぬ。何となれば各國勞働者間に於ける共通の利害は、一國の資本家と、勞働者との間に於ける共通の利害より一層大なるものがあるからである。近代の戰爭は資本家の奸策より生ずるのであつて、彼等は唯自己の利益を圖る爲め各國多數の民衆を騙つて相殺戮せしむるに至る。而してプロレタリヤは其解放に依り自ら繫げる鎖を失ふの外何物をも失ふ事なく、却つて之に依て世界を征服することが出來る。萬國の勞働者團結せよ。

斯の思想は必ずしも國境の撤廢を主張するものではないが、國際間にプロレタリヤの同胞關係を組織することに依り永久平和を招來するを理想とするものであり、各國

民族相互の縱斷的關係よりも、資本家對勞働者の階級別橫斷關係を重視するものである。

此思想は第一第二インターナショナルと爲り、內部の分裂紛擾や種々の變遷を重ね今や第三インターナショナルと爲つて居るが、此主義の實現が戰爭の廢止ともならず平和の招來とも爲らず、却て破壞氣分を誘進しつゝあるは革命後の赤露に於て現に經驗されつゝあるではないか。

一九〇七年ストッドガルト及コッペンハーゲンに於けるインターナショナル會議に於て歐洲戰爭の開始せられたる場合如何なる態度を取るべきやに付き論議せられ、一部特に佛國代表者側から勞働者の一大同盟罷業が提案されしが、決定するに至らず、曖昧裡に一九一四年を迎へ、眞先に戰爭に同意したのは獨逸の社會黨にして、墺國の者之に次ぎ、佛國の者も亦之に倣ひ、ブルジョアを終生の仇敵なりと呼號した首領グエストは進んで臺閣に列し。飽迄平和を唱へたジョーレスは、間もなく賣國奴として暗殺せられた。英國に於ても少數の獨立勞働黨を除き、其他の勞働黨は亦政府を支援

して參戰に贊成した斯の如くして長き年月を以て築き上げられたるマルクス主義と共不戰主義は沒落し去つたのである。之を以て人類生得の感情たる國家生活を否定し又は不戰主義を主張する議論が、如何に空想空虛のものであるかは贅言の要なし。斯の世界大戰の大試驗に見事落第したる陳腐主義を、我國の或る人々等が新思想だと獨り嬉しがり、軍備の徹底的縮小を呼號する低腦さは憫むに堪たるものだ。而も此等主義者の宣傳にかぶれて恒久平和を夢想する人々は一層憫むべきものだ。

十九世紀に於ける帝國主義の流行は激烈なる軍備競爭を顯出し、其の負擔に苦しむ國民は連りに不平の聲を上げ、玆に軍備制限論が擡頭し、引續き各國に平和運動が起り、仲裁々判に依り戰爭を避けんとする宣傳盛となり。遂にベルンに萬國平和事務所を設立するに至つた。而してダイナマイトの發明者瑞典人アルフレッドイベルは遺產の一部を平和黨に提供し、米國の鋼鐵王アンドル、カーネギーも亦平和宣傳の爲め多額の金を費消した。之と同時に平和文學勃興し、猶太系波蘭人イワン、ブロックは「戰爭の將來」を著して、戰爭は世界を破產と饑餓に導き引續いて革命の起るべきを豫言

し、英人ノーマン、アン、ゼルは大幻想に於て、近代的社會狀態及經濟組織の下に行はるゝ戰爭に在ては、勝敗共に一場の幻想に過ぎずして、戰勝國と雖も國家必須の經濟生活には變更を來さゞるを得ずと論ずる等、平和を謳歌して深き印象を與へ平和運動の促進に與つて力あるもの少からず、之と前後して各國の急進社會主義者等は軍備反對運動を起し、佛國に於て最も激烈を極めた。

一八九八年(明治三十二年)三十六箇國の代表委員がハーグに集まり、第一次平和會議が開かれた、其目的は武備問題を解決し、武裝平和の危險を緩和せんとするに在りしも列强間に競爭心野心嫉妬心猜疑心等ありて公平無私ならざる以上は、何事も爲し得ざるは始めから判つてゐた。一九〇七年第二回平和會議が、四十四箇國の代表者に依りて開かれたが、武備制限問題は議論のみに終り、只仲裁々判所が設けられ、空中よりの爆彈投下と毒瓦斯使用禁止の陸戰法規が作られしが、國家興廢の前には其大部分が世界大戰を通して一片の反古に過ぎなかつた。

各種の平和運動が盛になつても戰爭の勃發性には少しも變化を及ぼさず、南阿戰爭

日露戰爭伊土戰爭バルカン戰爭等踵を續で起り、遂に世界大戰と爲つた。此間仲裁々判や平和會議が國際平和に何等寄與しなかつた事は問ふ迄もない世界大戰は平時の條約たる中立國の侵犯や海陸戰法規の蹂躙に依り、此等一片の紙は必要の前には何等の權威なき事を示し、又戰敗國は勿論戰勝國も經濟生活の一大痛擊を受けて局を結び、戰爭の爲め父子兄弟を喪ひ又は戰場にて具さに慘苦を嘗めたる人々等は勿論、參戰國民は戰爭の慘害に戰慄し、社會主義者等の平和宣傳に雷同して、戰後の平和熱は熾烈を極め、何れも子々孫々に至る迄未來永劫戰爭してはならぬと痛感したのであるが、事實は依然として舊態を存し、露獨支の內戰露波戰爭バルカン戰爭希土戰爭シリヤ及モロッコの戰爭等相次で起り、戰爭絕滅の徵候は少しも見へないのである。

大戰中及其後歐米强國の爲めにする所の宣傳は、戰前の平和宣傳と相俟つて、可なり根强く我國民の頭に浸み込んだ。獨逸の敵なりし連合諸國は獨逸の軍備が比較的整備しありしを奇貨として、大戰勃發の當初より大戰は獨逸皇帝及一部軍閥汎獨主義者軍國主義者世界政策主義者等が之を準備し企圖し挑發惹起したものだと、盛なる宣傳

を行ひ、白耳義の中立侵犯潛航艇戰及占領地に於ける蠻行等を誇張作爲して其非を詰り、極力自國民の敵愾心を煽り且つ世界の同情を買ふに努力したものである。當時獨逸は其四圍を包圍せられ、獨逸より出づる情報は直接我國に傳らず、間接に來れるものゝ內獨逸に有利なるものは悉く改變せられ、邦人は獨逸に不利なる情報及宣傳のみを接手した。加之勝者の威力は戰爭の全責任を獨逸に塗付けた爲め、近視眼的にして英米崇拜者の多くを有する我國では軍隊の充實は戰爭惹起の危險を伴ふものとして之を排斥するに至つたのである。何くんぞ知らん獨逸が決して戰爭惹起者に非ざるは當時の事實及文獻にて明かに今日證明され得ることを。大戰終結するや、英米等は日本の强盛と成るを忌み、何とかして日本の勢力を制肘せんと、連りに日本を軍國主義なり侵略主義なり好戰國なり東洋の獨逸なりと誹謗して、日本の國防力縮小の伏線を設け、且つ盛んに平和宣傳を行ひ、現在の優越なる自國の地位を永久に維持すると共に、日本をして自發的に軍備縮小の氣運に向はしむる一石二鳥を擊つの策をなしたのである。蓋し平和なるか若しくは他國との戰爭に敗けざる以上、彼等は依然として世

界の第一國たるを得るからである。彼等は我國が漸次彼等の思ふ壺に嵌まりつゝあるを見て、會心の笑を漏しつゝあるに相違ない。

恒久平和の建設は日本國民の使命として君民上下の萬古信奉する所である。何等私なき眞の平和論ならば誰一人として歡迎しない者はない。一種の陰險なる術策を包藏する平和論は日本精神を侮辱するものとして其儘受入れることは出來ぬ。

二　平和の欲求と人類本能の衝突

大戰後平和論の旺盛なるより生れたものは國際聯盟であり、華府會議であり不戰條約であり倫敦會議である。國際聯盟成立後既に十二年此間に於て吾等は其實效力の仲裁々判と極めて僅かの相違しかないことを學んでゐる。華府會議の條約も條約丈は實行されたが、英佛空軍の擴張競爭英米の補助艦建造競爭、新嘉坡軍港築造等軍備競爭の精神は之あるが故に毫も衰へず、不戰條約の理想を聲明した程度のものに過ぎずして過去に於けるヘーグの平和會議と撰む所なし、倫敦會議に至りては、法衣の下から

鎧を見せた樣なもので、不戰條約も平和論も愈々心細きものだと感ぜしむるのである。他國から絕對に侵襲せられざる地理的掩護の下に在る富强國が、其海軍に大擴張を加へ侵略戰の徹底的勝利を確保し。防勢國唯一自衛の武器たる潛水艦に大縮小を加へるは、所謂時代思想に逆行せるもの之より甚しきはない。即ち大戰後の平和も聲の大なる丈けで、其の實質は武裝的平和たることに於て大戰前と殆んど變りがないのである。

之を歐洲に見るに歐洲は今日でも大體戰前と同じく舊同盟側舊協商側との二派に分れ正義人道と云ふよりも寧ろ武力に依り御互に衞つてゐる。其武力が大戰前よりも現在に於て却て增加してゐるのは注目に値する。即ち一九三五年歐洲の常備軍三百七十五萬、現在四百三十五萬だ、今日舊同盟側に約百萬の强制減兵を爲し、舊協商側强國も若干の減員をしてゐるが、舊協商側が表面自國の兵力を減じても、夫れ以上の兵力が新に製造されたる國家に增加され、之に依り舊同盟側を抑へ付けてゐることを雄辯に物語るのである。即ち今日の世界は依然として武力を離れてゐない。

人類が平和を愛好するのは確かなる事實だ。然し夫れ丈けで生活が出來るものではない。人類の生活は他と關係交渉が緊密だ。世が進めば進む程其關係交渉は緊密の度を加へ重大さを增して來る。所で人類には向上慾がある。而して生存競爭に支配される。故に人類の生活なるものは排他的鬪爭を以て一貫する。斯の排他的鬪爭は平和手段を以て行はるべく、國家が絕對無限の權力を以て强制するが、暴力的鬪爭も亦盛んに行はれる。世界の文明國家では國民に概ね平等の權利待遇を與へ、暴力的鬪爭の原因たるものは極力芟除の手段が盡され國家の力を以て國民の保護取締に任じ犯行者に對する懲罰は遺憾なく實行され、而も國民各個の文化道德は過去に比すべからざる進歩を來して居ると言はるゝも、今日に於ける暴力的鬪爭の割合は上古未開時代に比し減少せりと認むる能はざるのみならず、否却て上古淳朴の時代よりも增加の傾向あるを感ぜざるを得ない。即ち鬪爭は人類の本能だと言ふも强ち過言ではあるまい。

今や交通通信の發達に依り世界は著しく縮小され、國際間の利害關係交渉は一國內に於ける比隣住民の相互關係よりも更に重大なるものがある、然るに戰爭の原因たる

ものは一として除外されない。力ある國若くは之を爲し得る地位に在る國の橫暴行爲の勝手たる狀態にあり其の取締懲罰に任ずる絕對權力は何等存在しない。之が爲め國際的橫暴行爲は頻に絕間なく起る。其の戰爭と爲らざるは被害國が泣寢入りするからである。然れども何處迄も徹底的に泣寢入り得るであらうか。故に正義人道とか平和不戰とか謂ふ事が盛んに流行するのは唯掛聲たり看板たるに過ぎない。吾人は其の掛聲や看板と事實とを比較對照して見ることが必要だ。然るに我政界及言論界の多くは掛聲の偉大なると看板の立派さに目眩み、最早戰爭は無いものと心得居る樣だ、早計も亦恐ろしい。世界の現狀に鑑み斯の僞裝的街耀的の表皮を一枚剝いで見るならば、人類の本能は猶ほ依然として野蠻なる原始時代と相距る遠からざることを誰でも痛感するだらう。

平和は人類の神聖なる欲求であるが其文化は未だ精神的に其本能を離れて居ない。絕へず渾沌たる雰圍氣の中に鬪爭を續づけて居る。此文化を向上して恒久平和の世界を造るのが日本精神の期待する所としたならば皇國日本の健在は寧ろ世界の爲め天壤

無窮ならねばならぬ。之と同時に此重大責任を感ずる日本國民は一段の自重自奮を要すべきである。

三　軍縮の眞價

太平彌々續き生活の程度次第に高まれば、所謂治に居て亂を忘るゝ危機實に此際に胚胎す、祖先百戰の山河に生れて、目に旌旗の靡々を見ず、耳に鼙鼓の轟くを聞かず文恬武熙安きに慣れて危を想はず、人々益々智にして益々死の惜きを知り、慾に趨き利に就き世を擧げて拜金主義に墮ち黄白萬能の風を生じ、人格才能は社會に重きを爲さず、金さへあれば低級無能漢も社會を横行濶歩するを常態とするに至る。事茲に至れば國家の存亡に關する問題の如きは自ら腦中影の薄くなるのは文化の低き人類の弱點にして國民の日常生活に直接の感應なく却て之に重大の負擔を感ぜしむる所の軍備は輕視され、一轉して經濟一天張の國防經濟論が生れ、黄白萬能論者の眼には直接不生産的なる陸軍が不必要の大身代化を高調するに至るのは決して偶然ではない。

今日の世界は正義人道の世界でも平和不戰の世界でもない。歐洲の列國が正義人道や國際聯盟等の御蔭でなく武力に依て自ら衛つてゐることは前にも述べた通りだが、之は歐洲丈けでなく全世界皆然りだ。正義人道平和不戰は看板として全世界に掲げられてゐるけれども、此の看板に何等の力がある譯でない。必ずや背後に實力を要する其の實力とは武力が主であり經濟力は從である。經濟萬能者の謂ふが如く經濟が主であり、武力が從であるならば經濟力に於て世界に冠たる英米の軍備は先づ第一に撤廢さるべきものだ。殊に地理的掩護の關係上陸軍に於て然りとする。一國内に於ける個人が戸締を爲さず、警察の保護を缺いたならば如何、警察も軍隊と同じく不生産的機關であるから之を經濟化する爲め大に縮小せねばならぬと云ふであらうか。國際間に於て一國の有する武力は個人に就て言へば戸締であり警察力である。國際聯盟や不戰條約の如きは日本精神より見て大に尊重すべきであるが、現在の所では實用の資に乏しき一種の裝飾物に過ぎないのである。

故に國際間に於て平和を維持し、國民生活を擁護し國際經濟の進展を支援する實力

としては軍備の外に何物だも存在しない。固より外交は之が爲め緊要缺くべからざる手段であり、外交のみを以て目的を達する場合亦少からずと雖も、是れ多くは兩國の存亡若くは重大なる利害に關せざる輕易の問題に就いてゞある。苟も國家の存亡或は重大なる利害問題に於て兩國所見を異にする場合の外交は背後に嚴然たる武力を擁して折衝を盡しても遂に目的を達せざること多く、過去に於ける戰爭の多くが之を證明してゐる。況や斯の武力を缺げる外交に國家民生の生命を放任するの危險なるは多言を要せずして明らかなことだ。

一國軍備の力が如何に外交上に敏感なる影響を及ぼすかの參考として、過去に於ける日本外交に關し顧みて見よう。

一九〇六年(明治三十九年)桑港學童問題起り引續いて移民問題紛糾するや、我政府の希望に依り米國は我移民の轉航禁止と共に歸化權以外に於ては邦人の差別待遇をなさず、兒童も亦白人學校に通學を許し、其後支那が試みて失敗せし所の自發的にする移民出國制限法を我國に對しては所謂紳士協約として快諾し、更に明治四十四年帝國

政府の主張を容れ、日米通商條約中移民に關する但書を削除して帝國の體面を尊重した。當時日米兩國の狀況を一言するならば、我國は世界一の强國と見られてゐたロシヤに對し赫々たる戰勝を收め、國民の元氣頗る旺盛にして政府の威力亦侮るべからざるものあり。國軍は列强に對し精鋭を誇るの慨があつた。之に反して米國は軍備の組織不完全にして殊に太平洋方面の軍備に於て然るものあり。陸海軍共に太平洋政策遂行上の施設なく、巴奈馬運河は漸く開鑿に着手せしのみ。日米戰爭の聲は米人有識者の心膽を寒からしめた。斯の關係が當時の日米外交上に現はれたのである。

歐洲大戰漸く熾烈となるや、米國政府は我要求を容れて西部諸州の排日運動を彈壓し、加州其他に於ける排日立法を抑止し特に一九一六年の排日法の抑止及翌年の石井ランシング協約締結の如き自制の因て來る所は何か。當時歐洲諸國は戰爭に沒頭して他に用ゆる力なく、帝國の地位は比較的に大なる向上を來し、而も米國は參戰後全く帝國を制すべき武力を缺くに至つたからである。固より吾人は外交上の努力を認むるに吝なるものではないが、外交の支援となりし我國の武力を看過するを得ないのであ

る大戰後米國の軍備は未曾有の充實を來し、且つ經濟上世界最高の地位を獲得した。之に反し我國は華府會議に於ける海軍縮小關東大震災陸軍の大縮小國民の國防に關する冷淡等種々の方面にて其の爲すなきを看破せられ、一九二〇年の加州土地法制定に次で一九二四年の國際條約違反の性質を有する新移民法の制定となり、米國は遂に徹底的排日を斷行したのである。之を思へば軍備の外交上に及ぼす力が如何なるものであるかは。何人と雖も之を明察し得るであらう。佛國政府の首相エリオ氏は一九二五年國際聯盟で哲學者パスカルの言を引いて、

力を伴はざる正義は無力なり。

正義を伴はざる力は暴力なり。

と喝破してゐる。軍備の背景を伴はざる外交の如何に無力であるかを道破して餘蘊なしと言ふべきだ。

之を要するに我軍備の目的は唯々萬一に備ふと云ふに過ぎぬ、此備ありて國家の生命も國民生活も將又國際協調も共に保障せらるゝことは無論の事だ。

四　經濟發展と軍備

國家の生存國民の生活殆んど其全部面は經濟問題と不可離の關係を有つのである。我國に於ける人口原料食料問題も政治問題生活問題であると同時に經濟問題だ。國家及國民は其生存生活の狀態をより善き狀態に導かんとするは自然の希望である。殊に其狀態が貧弱缺乏の程度に在るものは勿論だ。玆に於て經濟的競爭が起る、其の競爭は屢々經濟的葛藤を生ずる、經濟的葛藤は即ち戰爭の原因だ。古來多くの戰爭には經濟紛爭に基因せざるものもあらう。又戰爭原因が一見政治的利害の紛糾にあるかの如く見ゆることもあらう。然し乍ら近代戰爭に就て仔細の點檢を加ふるときは、其の殆んど全部が經濟的利害に基くことを發見し得るのである。世界戰爭は經濟的競爭及び之に伴ふ不安より生れ出でた最大の戰爭であることは絮說するまでもない。而してベルサイユ條約を見た丈けでも戰爭が如何に切實に經濟的利害に基因せるかを看取することが出來る。即ち聯合國は該條約に於て經濟的方面に最も重きを置いた。而して獨

逸より國際經濟活躍の道具一切を沒收したものである。世界戰爭に至る迄には各國政治家は戰爭を未然に防がんとして少なからざる努力をなしたが、遺憾ながら問題の核心に觸れなかつた。彼等は平和人道を口にするのみにて、經濟的葛藤の除去が、戰爭を防遏する唯一の方法であるのに氣が付かなかつた。戰爭は內容空虛なる平和人道の看板のみで防ぎ得るものでない。實に世界平和を維持するの道は、各國間の經濟的關係を討究し、其不公平を矯正して政治的紛爭を防止するにある。甲乙兩國は今日直接天日を指して平和を誓ひ得るだらうが、兩國間に存する無制限の經濟競爭及經濟的不公平を其儘に放任するならば、誰か明日彼等の間に干戈相見ゆる不祥事の惹起せざるを保證し得ようか。

世界戰爭の如き未曾有の慘事を經ても各國人の眼はまだ醒めない。國際的經濟關係には何等の統制も改變もない。戰前否十九世紀の狀態を其儘繼續してゐる。資源豐富なる國は決して之を他國民の手に假さず、自己の手のみに之を開發し保存するのみならず、其國力の强大なるを利用して世界到る處の資源を自己の掌中に收むるに努めて

他を壓迫排斥す、市場の獲得又然り。然も白人等は世界人口の三分の一を以て世界陸地の九分の八を領有し、住民稀小なる廣大の領土を有しながら、人口過剩にして生活の苦難に堪へざる他國民の移住を許さず、經濟公平の原則や人種差別待遇撤廢の問題が國際會議に提出さるれば、直に一蹴に付せらる。即ち今日の世界に於て正義人道なるものは各國共通の都合宜き範圍內に限られ、其他の場合は力のある限り橫暴勝手たるべき世界だ。從て一國の軍備は其國の經濟力の許す限り强大と爲り。之に依つて國家民生の生活を保護し外交交涉の支援たらしめんとするは、列國共通の態度である。而して軍備に代はるべき確乎不動の保障が與へられざる限り、軍備の競爭（兵員のみに非ず）は依然として繼續し、戰爭の機會も亦除去されないのである。然るに一知半解の經濟論に捉はれ經濟を都合善くする爲め軍備の大縮小を希望するが如きは、今日の所謂經濟戰が或る意味に於て武力戰の先驅であると言ふ事に氣付かざる盲論であり恐も亦甚しいのである。此等の盲論者は宜しく米國の强大なる軍備は亞細亞に於ける經濟戰の支援が目的であり、經濟戰の目的は干戈に訴へても之を達成すべしと謂ふ米

國の國策に關し熟考する所があらねばならぬ。

五　誤れる平和思想と國家の盛衰

要するに危險極りなき世界の形勢に處し軍備を輕視するの風は、誤れる平和の宣傳に醉ひ治に居て亂を忘るゝ軟弱文化の餘弊に出づ。斯の如きは實に國家衰亡の兆にして各國興亡の歴史を讀む者は何人も否定し能はざる所である。先づ吾人をして現代文豪大町桂月の筆を借り、我國豪族興亡の跡を語らしめよ。

平安朝は文化の餘弊其極に達せし時代なり。平安朝と始終せし藤原氏の一族朝廷に跋扈し、長袖緩帶遊戯これ事とし、泰平に慣れて武を講ずる者なく春の朝の花を歌ひ秋の夕に月を詠し、優柔習をなし、淫靡風をなし、征討邊防の事は一に源平二氏に委し、武士よ地下人よとけなし去りて之を齒牙に掛けざりしが時勢は一轉し、又優しき筆を取りて優劣を歌合せに爭ふ時代は去り、劍を執りて天下の權を爭はざるを得ざる時代は來りぬ。而して言ふ迄もなく、藤原氏は當時文化の感化を被らざりし武士に蹴

落されぬ。平氏藤原氏に代りて天下の權を握るに至りしかど、不幸にも空氣が腐敗したる都門に居を占めたれば、彼が一族子弟見る見る間に優男となり、春風簾前舞腰裊々として滿都の女兒を惱殺したる紅顏の美少年が富士川の水禽の聲に腰を拔かしたるも亦怪むに足らず。一門浮沈の際に臨みても、歌集を懷にし琵琶を抱き横笛を吹く風流才子のみ多く、知盛輩一二人を除くの外又武士らしき者なかりしかば、言ふ迄もなく源氏に亡され了りぬ。德川氏は草茫々たる武藏野に府を設けしが、當年の風流男の言問ひし鳥の名の讖を爲して山奥ならねど住めば玆も都となりぬ。武者振り類ひなかりし三河武士も子孫は花の大江戸に太平の春に醉ひ、河原乞食に接し、淨瑠璃に耽り、流連荒亡して楊柳を折るに至りては、骨は海月よりも軟かになりぬ。此際衣は肝に至り袖腕に至る底の服裝に腰間の秋水鐵をも斷つべき意氣天を呑みつゝありし南海西海の武士の武骨なるは此上もなけれども、武骨なるだけに都門の弊風に軟化されず、豪氣の發する所勤皇の魁首となりて終によく幕府を倒せしに非ずや。

漫りに文化と謂ふ勿れ。漫りに開化といふ勿れ、文化は猶ほ酒の如し。

酒を飲む者は必ず醉ひ、文化に沈める國は必ず亡ぶ、歴史は正直なり常に人間に向ひて之を語れども、太平の安きに慣れて人また危きを思はざるなり。

更にオランダ衰亡の歴史を尋ねるときは、其事情が餘所事とは信ぜられぬ事程我國現今の內情に酷似してゐる我國民たる者宜しくオランダの事情に鑑みる所ありて、思想の方向轉換を行ふの必要あるを痛感する。若し夫れオランダ衰亡史を詳述するに至りては小冊子の能くする所に非ざるを以て、極めて要點のみを撮みて參考に供するに止める。

オランダの最も隆盛を極めしは十七世紀の前半であつた。當時オランダは、イスパニヤ國に代つて歐洲中の最も富める國であつたのみならず、海上に於て實に第一の雄國であつた。即ち其海軍貿易運送業漁業植民政策の如きは殷盛を極め、殆んど獨占事業の觀を呈した。例へば商船の數は優に三萬四千隻に上り、當時世界貿易に從事する各國總數の四分の三を占め、漁業船の數は二萬艘の多きに達し、全然他國を壓倒してゐた。加之製造業造船業の如きも他國の追隨を許さざる狀態にて非常の利益を占めて

ゐた。元來オランダは地味頗る瘦せ氣候不順にして農業に適せず、森林や鑛山もなく生產業には殆んど絕望であつたにも拘らず、眼を海上に着け、勤勉敢爲節儉忍耐冒險の國民性を縱橫に發揮し、事業に對する小規模計畫は、極めて周到緻密且つ遠大であり、些々たる目前の小利に拘泥して永遠の雄圖を忘却するが如きことなく、凡ての事業は數百年の先きに着眼して爲し得る丈け大規模の利益を收得することに努めた。就中海軍を擴張充實して其海上事業を保護するのみならず、之に依りて國際上多くの有利なる主張要求を貫徹し、以て海上發展の汎ゆる妨害を除去した爲め、歐洲の最富國となり、文明の中心と爲るを得たのである。

斯の如く一時强大隆盛を極めたオランダも、爾後隣國英佛等の攻擊を受け特に國內事情の爲め漸次衰運に向ひ、遂に十八世紀の末葉に至りフランスの屬領と化し滅亡するに至つた。その滅亡の由來を討究すれば概ね次の如くにして大なる敎訓を示すのである。

第一は國家の統一不完全なりし事である。當時オランダは各州主權を有する七州の

聯邦より成り各州共自己の利益を重んじ全國の利益を考へず、爲めに國家の大方針は絶へず動搖し遂に一定の國是を有する能はず、軍備の如きも之がため累せられたことが一再ならずだつた。第二は黨爭の弊である、オランダには創業の際より二派の政黨あり、年を經て黨爭漸次激烈を加へ、眼中自黨あつて國家なき情勢を馴致し、一黨政權を握れば他黨は事の善惡を問はず妨害を加へ、何事をも成功させぬ如く行動した。第三は國民の墮落である。オランダ國民は一度得意の境遇に達するや、忽ちにして曩日の艱難苦辛を忘れ、徒らに當面の榮華と富裕に醉ふて將來に備ふるの方策を止め、唯金錢の力と巧妙なる外交に依り何事も處理し得るものと考へてゐた。實に衰頽期に於けるオランダ人は黃金萬能主義であつて、人格才能は社會に重きを爲さず、金さへあれば誰でも社會を横行濶歩した。之がため國民の奮發心はなくなり、安逸放縱は一般の風と爲つた。而して彼等は自ら如何に巧妙と信ずる外交でも千遍一律に外交の力を以て國家の目的を達し得るものでないといふことを知らなかつた。又外交は背後に優勢なる武力あり萬一の場合之を利用する覺悟あつてこそ他國を屈從せしめ得るもの

だといふ事を知らなかつた。更に又相手國の利害が根本的に我と衝突する場合には、何時でも武力に訴へる丈けの準備があつてこそ相手を平和に屈伏させ得るものだといふ事を知らなかつた。否知らざるに非ず、嘗て此の方針を以て外交を行ひ富强と爲つたことを忘れて了つたのである。而して彼等は徒らに小利巧の外交術を弄し、相手が强硬にして調和し難き場合には、大に讓歩して平和を破るまいとしいかなる代價を拂つても平和を購ふの政策を取つた、之が爲め相手に手元を見透され、思はぬ弱點を暴露することに爲つたのである。

第四には國防を輕んじた事である。一六四二年頃のオランダ海軍は軍艦百五十隻を有し世界最强のものであつた。然るに一六四八年ウエストフアリヤ和約の後貿易漁業の保護に十分なりとの理由の下に僅か四十隻に減じ、就役艦すら其乘員を減じた。又陸軍にも大縮小を加へた。言ふ迄もなくオランダは貿易航海が生命であるから、之を確保するには何よりも海軍が必要であるのに、斯の如き大縮小を加へたる盲目さは驚くべき極みだ。次にオランダは島國でない其隣境には國運駸々として進み、武備を充

實するに汲々たるオーストリヤ及びブランデンブルグ以下の諸獨逸國あり、殊に恐るべきはイスパニヤに代つて將に歐洲の最强國たらんとするフランスにして、錬磨されたる陸軍を以て虎視耽々常に隣國の隙を狙つてゐた。此場合オランダたるもの一層陸軍の擴張充實を圖るべきに却つて之を縮小するとは非常識も亦甚しいのであるが、オランダとしては經濟力と外交とに一切を托するを以て、最も進歩した考へだと錯覺してゐたのである。

此頃某新聞に連載せられつゝある新渡戸博士の「續偉人群像」と題する記事中元駐日米國大使モリス氏と大隈侯との問答がしるされて居るが現代日本の教訓として大に價値あるものと思ふ左に之を記して見よう。

兩雄の戰爭論

伯爵のいふのに

しかしこの戰爭は一種の病である。この病は青年にある病とは徵候が大分異なるやうに診察される、どうしても老いたる文明に伴ふものと思はれる。

モリス氏　私はこの戰爭を病的現象とは見ません。從つてこれに從事してゐるヨーロッパの諸國が老いたる病身とも信じられません。

大隈伯　これが病氣でなければ何ですか。

モリス氏　これ正に起こるべき生理的の作用であつて、人類の活動とでもいふべきもの言葉はいかなるものを用ふるにしても病氣とは見受け難い。

大隈伯　病氣ぢやなくしてかくのごとき苦痛を人類に與へるといふことは、私は考へ得られない。

さうしてかれは得意の統計を片つ端しから擧げて、

すでに何萬の死者があり、何十萬の負傷者があり何億の資產を消費した、延いては何千萬の婦女子さへも苦しんでゐる、かくのごとき苦痛を全世界におよぼしたのは確に病的なることを示すものである。

モリス氏　苦痛が多いから直に病氣と稱することは無理ではありませんか、順序正しく進む生理的作用においても苦痛が伴ふことがある、現に婦女子が產をする時には

非常な苦痛を覺えるけれどもこれは病氣ではない、痛みのなき病氣もあるごとく痛みある通常の生理作用もある。

大隈伯　なる程、そりやあ御尤もの例である、左樣、しかしあなたのやうにいはれると、餘程よい子が生れなければ間尺に合はん譯ですな、かくのごとく犧牲を拂つた以上は、餘程いゝものが生れなければ引合ひませんな。

大隈伯受太刀

といふと、モリス氏は

そりやあ、われ〳〵のかれこれいふところではなからうと思ひます。なる程今回の戰費は大した額に上つてをる、がしかし、何しろ新しくこゝに何物かゞ生れるといふ時が迫つてをるので金額のこと等を考へてはをられんのではありませんか、われ〳〵の女房が產氣がつく時に費用が嵩むから控へろといふ譯にも行かず、また不幸にして難產であつたならばわれ〳〵の家產を傾けても手當をするではありませんか今この戰爭によつて全く新しい世界が世に生れるものと私は信じます。費用等のこ

とは顧みる隙がないと思ひます。

すると、伯は

なる程御尤も、しかしさうなら餘程のいゝ子が生れないと間尺に合ひませんね。

モリス氏　それもわれ〳〵のかれこれといふことではなからうかと思ひます。產が重かつたがために生れる娘は美人であるとか、むすこは怜悧であるとかにきまつた譯ではない、安々生んでもいゝ子もあり、難產しても愚鈍の子もある、今後生れる新しい世界は現今より遙に惡いものであるかも知れん、私もこの點についてはいろいろに想像も描いたが今より大していゝ社會が生れるとも信じ難く思ふのであります。そんならば世の中が惡くなるかと悲觀する根柢もありません、たゞ別な社會が生れるといふだけは私は確信するところであります。時々悲觀的に新社會は、とても十九世紀の社會のごとくにはなるまいと思ふこともあります。閣下や、またわれ〳〵のごとき若輩とてもとに角十九世紀の後半期を見た者は、世界の歷史の最高點に達した時代に遭遇したものとなるかも知れん、これからの世の中はどうなります

かといひながら、やゝ沈鬱な樣子をしていふ聲も、議論がましくなく沈んだ。

伯爵も餘程思ひ深く感じられたものと見えて、

なる程御尤もです。

といひながらその時すでに机の上に並べられた煙草や茶菓に手が出て、その後の話は普通の世の中の話になつたことがある。

暫くして別れを告げるに當たつて、握手をしながら伯のいはれたことに、

今日は實に愉快なお說を伺つた日ごろになく愉快に思つた。

といひながら再會を期して別れた、その時我輩も伯と同車して早稻田に送つたが、車中においても伯はしきりにモリス氏の思想家たるを褒めて、

どうもあゝいふ話は日本人とは出來ない、とかく日本の政治家といふものは乾燥無味な荒つぽいことのみいふが、あんな思想を交へるのには日本では話相手がない、甚だ愉快であつた。

と喜んでをられたことがある。

後藤男の審判

その後數日ならずして、我輩或る小宴會に臨んだ、僅十人足らずの人の集會であつたが、恰も後藤新平男(その頃はまだ男爵であつたが)臺閣にをられるころで、出席者も閣員が多數を占めてをつて、わが輩のごとき書生は二三人もをつたぐらゐであつたその席上わが輩、大隈伯、モリス氏の會見の話を述べたところが、そこにをつた人々が少からぬ興味を持つて聞いてをられた、話が終ると、後藤男のいふことに、

早稻田の老人も一本やられたやうだが、それでも受太刀ながら二、三回でも質問を發したごときさすがに大隈さんだけあるぜ、恐らくお互だつたならば、一口話をすると二の句がつげないでたゞ傍聽するばかりだが、……いかに日本人が思想に乏しいか、思へば恥かしいものだ。

と、しきりに同胞の思想方面に貧弱なることを歎いたことがある。

六　平和と戰爭

現今世界の各民族國家間に於て利害の不一致は山積してゐる。而も正義人道は只口頭の粉飾に過ぎず、各民族國家は自己の慾望を滿すに急にして他の利害境遇を顧みず不義無道は現に多く行はれてゐる。之に對し國際間の紛擾を公平正當に解決する絶對强制力は存在しない。而して戰爭の屢々起るべきはモリス大使の言を引くまでもなく現代文化の程度に於ては生理學及び歴史の懇切に吾人に敎へる所である。我國は正義人道平和の主義を以て世界に臨むものであるが、外交の賴み難きは目前に幾多の事實が證明してゐる。其外交を正義の成功に導く支援力は軍備の外にない。萬一の場合戰爭をも辭せざる覺悟あり武力ありてこそ國際紛爭を平和的に解決し得るのが現代である。故に軍備は列國相對の關係を顧慮し一國經濟力の堪ゆる限り萬難を排して强力ならしむべきである。元來經濟力を以て直に軍備決定の基礎條件とするが如きは一種の錯覺にして必要の軍備の前には寧ろ汎ゆる艱難と戰ふて必要の經濟力を培養する丈の意氣あらねばならぬ。獨り軍備のみに限らず百年の大計を現在の經濟力に膠着せしむるときは何日迄も進歩向上を期待することは出來ぬではないか。國民は眼前の小利些

細の事故局部の利害に捉はれ國家百年の大計と遠大の目的を忘却し軍備を輕視するが如き事に成つてはならない。乞ふ見よ古來戰爭の如何に驚くべく多きかを。信用するに足る某歴史家の調査に依れば、西暦紀元前一四九八年より紀元一八六一年に亘る三三五九年間に戰爭ありし年は三三三〇年にして、戰爭なき年は僅かに二九年なり、更に紀元一六〇一年より一九〇〇年に至る三〇〇年間に、戰爭回數二八六回に登る。之を以て見るときは殆んど毎年世界は戰爭があつたことになる。

米國ハーバード大學敎授ミュンスターベルグ氏の調査に依り、各國に戰爭のありし年數を擧ぐれば、

英國　自一一五〇年至一九〇〇年七五〇年間に戰爭四一九年
佛國　右と同年間に戰爭三八三年
露國　自一五〇〇年至一九〇〇年四〇〇年に戰爭二八四年
普國　自一六〇〇年至一九〇〇年三〇〇年間に戰爭一〇三年

英佛普墺の四大國は一七〇〇年以降大抵毎年の如く戰爭に從事し、米國は建國以來

一五〇年間に兵を用ゆる一〇六年に及んだ。(以上三氏の調査)

又明治二十七八年戰役後の事を考ふれば世界に戰爭なかりし年は僅かに三十九年四十、四十三年の三箇年のみなること左の通りである。

明治二十七八年　日清戰爭
同　二十九年　伊太利アビシニヤ戰爭
同　三十年　希土戰爭
同　三十一年　米西戰爭
同　自三十二年至三十五年　英杜戰爭
同　三十三年　北清事變
同　三十六年　セルビヤ革命戰
同　三十七八年　日露戰爭
同　四十一二年　土耳其革命戰
同　四十四年　伊土戰爭

大正元二年　バルカン戰爭支那革命戰
同　自三年至八年　戰爭大戰
同　八年以後　露國獨逸の內戰、露波戰爭、バルカン戰爭、希土戰爭、シリヤ戰爭、モロッコ戰爭、支那內戰、メキシコ內戰、南米諸國革命戰

我國が如何に戰爭勃發の脅威を受けてゐるかは、次章に於て述ぶる所なるも斯る戰爭の統計的觀察と以上本章に述べた所とを併せ考ふるときは、戰爭は近き將來に有り得べからずと漫然樂觀して軍備を輕視するは大なる誤である。然るに現代日本の政界及言論界の狀態は頗る憂ふべきものあり、本會の本書を編述する所以實に玆に存す。

本會は智識階級に屬する各方面の憂國の志士を網羅する團體にして、會員に在鄕陸海軍將官の多數を收容しありと雖も、陸軍個體の利害榮枯は此等在鄕者との個人的立場と何等關係あるものに非ず、本會を目して陸軍の提灯持なりと解するものありとせばそは大なる誤解である。本會は極めて自由の立場に在りて、寧ろ陸軍の態度に關して

は國家全體の利害を基調として大處高所より常に監視を怠らざるものである。又在郷陸海軍將官に至りては國防問題は數十年の長きに亘り絶えず研鑽せる所に係り、一般言論界の者と其選を異にして一日の長ありと自信するのである。從て本會の意見は最も周到に研究を盡せるものなりと斷言して敢て憚らぬのである。

第二章　戰爭の脅威圏心に立つ日本

一　日本と滿蒙

世界各國の內狀は多種多樣である。甲は土地廣大資源豐富にして生活富裕なるも、乙は領土狹く資源貧弱人口稠密に過ぎ生活困難を極めてゐる。斯の如き不公平は蓋し世界人類を創造せし所の神意に背くものである。故に乙國民が甲國に對し相當の義務を負擔する場合には甲國は其領土內に乙國民の居住營業を自由ならしむべきである。不幸にして我國は乙の狀態にあるも、年々一萬內外の移民が南米に行き得る外、各國

は其領土を閉鎖して我を容れず正義人道の那邊に在りやを疑はしむ。吾人は之に對し平和建設の前提として人類天賦の權利を主張する者である。而して從來我國民が關係薄く又努力の見るべきなかりし地方に對しては暫く主張を控へるが、北米合衆國の西部諸州乃至滿蒙の天地に就ては敢て之を下問に付するを得ないのである。

就中日本の滿蒙に對する特種關係は、極めて重大にして幾多深遠の理由を備へてゐる。其の歷史的地理的人種的經濟的等の諸關係は日鮮滿蒙の四者を渾然たる單一體に聯繫すべき天緣を具へてゐて、切つても切れぬ特種の間柄である。日本と滿蒙との抱合統一は太古以來我日本の傳統的國是である。遠くは神代出雲民族の徂徠連絡より三韓肅愼粛羯等彼我の交涉幾千年を重ね、近く日淸日露二大戰役の行はれたるは何の爲めか、是れ歷史的地理的人種的經濟的等の特種關係を基調とする傳統的精神の發露に外ならぬ。本來滿蒙は漢族支那の領土でない。滿洲は滿洲人の蒙古は蒙古人のものであつた。滿洲人が支那本土に君臨した時代には五族合邦の國家を成したるも、淸朝滅亡と共に滿蒙と支那との連鎖は斷絶したのであり、外蒙は現に支那を離れてゐる。

而も滿洲は朝鮮人の故郷であり、現住者としても間島方面を始め吉林省等の各地に散在する朝鮮人は山東より移住せる漢民族より古き歴史を有する故に邦人及鮮人の滿蒙移住者が侵入者だとすれば、支那人の滿蒙移住も亦侵入者である。要するに清朝顚覆後滿蒙は勢威ある支那軍閥に引きづられて來た迄の事である。歴史的に支那人の關係が古いと言ふならば、一層古くから朝鮮人は關係があつたのである。殊に遼東半島は我國が日清戰役後平和を顧念して恩惠的に清朝に返付したものであり、滿蒙は日露戰爭に於て數千萬の生靈を犧牲とし數十億の國費を投じ、之をロシヤより奪還して清朝に交付したものであるのみならず、爾後二十億の巨費を投じ今日迄二十五年間に亘り產業を開拓し、治安を維持して支那內亂の埒外に置いた、之が爲め住民が安樂の生活を爲し得たのみならず漢人の滿蒙移住者は既に約二三十萬の多きに達し滿鐵が每年支拂ふ所の勞銀一億八千萬圓の大部は支那人を潤してゐる。

滿蒙に於ける我特種權益の文字が國際的公文書に存在するや否やは問題でない。石井ランシング協約が消滅するとも、大正四年の日支條約を支那が無視するとも、事實

は何處迄も事實として殘る。而も斯の如き特種關係は其重大なる點に於て他に匹儔を見ない。之に比すれば米大陸に於ける米國のモンロー主義の如きは過大の要求である。而して吾人は敢て「滿蒙に於ける支那の主權及領土權を侵害せんと欲するものではない」只該地に於てする經濟的發展は支那の尊重を受くべき日本の權利なりと確信するものである。今や日本は國民生活の困難を緩和すべく之を國內の施設に求むることは至難の問題にして殆んど不可能の狀態である。

故に日本民族の榮枯興亡は一に滿蒙の天地に懸つてゐる。之を妨碍する者に對しては、國運を賭して戰はねばならぬ時代が早晩到來せぬとも限らぬ、是れ國民生活の保障と平和建設の信念に鑑み當然覺悟せねばならぬ事である。吾人の說を以て奇矯なりとする者もあらうが、見よ明治二十年頃に日清戰爭を眞面目に考へた人が幾人あるか、又明治三十年頃に日露戰爭を豫想した者が何人あるか、戰爭は勢なり今日何等認むべき徵候なしとするも、明日忽然として機來り勢發せん、勢の赴く所之に敵し之を遮るものはないサラエボに於ける一發のピストルの音はさしも平靜なりし歐洲の天地に漠

々たる戰雲を捲起せしに非ずや。

二　露支兩國と日本

日支の自然且つ合理的の關係は唇齒輔車の間柄にあり、相倚り相輔けて共存共榮を期するを以て兩國の幸福を增進する唯一の途なりとす、然るに今日兩國民集會の席上に於て、一片の外交的辭令として丈けでも、斯る語を口にする者あらば滿堂の冷笑と擯斥を買ふ迄に、支那人の考へはこゞれ、兩國の關係は面白くなくなつてゐる。其因て來る所の原因は種々雜多であるが、遠交近攻以夷制夷は支那の傳統的國策である。遠方の米國等に親み隣國日本を排斥する、毎年各地に流行する排日貨國恥記念の諸運動を始として、朝鮮琉球臺灣關東州を奪ひたる不倶戴天の仇として、小學校の教科書に掲げてある。之を眞面目に受け入れる純眞なる兒童が成人の曉に於て、支那一般の對日感情が如何に惡化すべきやは絮說の必要はない滿洲に於ける百萬の鮮民は利用し難き不毛卑濕の地を營々刻苦の餘良田に化すれば直に之を沒收され追放さる、斯の如

き例は各地に頻々たるのみならず、彼等は至る所で排斥虐待されてゐる。滿洲に於て邦人は鐵道附屬地以外に一歩も踏み出して居住營業するは至難だ、大正四年に締結された南滿洲及東部內蒙古に關する日支條約は彼我の爲め正當なるものであるに關はらず、支那は商租の二字に就て詭辯を弄し今尙ほ商租細則の協定を爲さず、言を左右に托して條約の效力を空文たらしめ、日本臣民たる邦人鮮人は必要の土地を商租し自由に居住往來するを得ないのである。而も甚だしきは支那は自ら商租須知及國賊條例等の內規を作りて、暗に日鮮人の土地商租を嚴禁し、鮮人に土地を貸與する者を嚴罰に處し、日本人と商租契約する者を國賊として死刑に處する等の暴擧に出でゝゐる、豈に驚かざるを得んや。

滿洲に於ける日本の勢力は滿鐵が代表してゐる。滿洲在住二十萬の邦人の大部は滿鐵の勤人と滿鐵に依りて生活する者だ、滿洲から滿鐵を取り去つたならば、日本人の影は殆んど無いと言ひ得る位に滿鐵は重要なものだが、我抗議に拘はらず支那はどしどし並行線を建設する京奉線の延長にして奉天より海龍を經て吉林に至る滿鐵東方の

大並行線は既に完成し、將來更に綏遠方面に延長の計畫であり又齊々哈爾より洮南、白音地拉打虎山を經て連山灣に通ずる滿鐵西方の大並行線は、今や一部建設を殘しあるのみ其全通は數年を出でないだらう、連山灣胡蘆島築港の計畫は着々進行し既に着手したとの噂もある。今でも此等並行線は運賃の低廉なると支那自身の鐵道であるのと官憲の滿鐵妨碍策等と相待つて、盛んに滿鐵の收入を奪つてゐる。將來吉林、洮南以南全通し連山灣の築港完成の曉には、日本の滿洲に於ける勢力は半ば以下に減ずるかも知れない。實に滿洲には日本の重大問題が累積してゐる。

又ロシヤは世界赤化侵略を企圖しつゝあり、將來も赤色政體の繼續する限り斯の目的を變更せざることは絮說する迄もない、彼はその目的が歐洲に於て達し難きを見るや、鋒を轉じてアジヤに向ひ、既に外蒙古及烏梁海を事實上に於て蘇聯邦の一邦と爲し更に新疆を侵略するの企圖を露骨に實行し、屢々コロンバイルを使嗾煽動して獨立せしめん事に努力した、又曩きに廣東に勢力を扶植し、蔣介石北伐の際共產黨の盲動が長江筋其他に於て支那及各國民に大なる損害を與へたのは、今尙ほ世人の記憶に新

たなる處にして、我が共產黨に資金を與へ我國礎を崩潰せしめんと努めつゝあるは、世人の熟知する處である。ロシヤは支那と犬猿の間柄に在り、昨年夏秋の候東支鐵道問題に關し遂に兵力に訴ふるに至つた。露支抗爭は延いて滿洲に於ける日本の權益に重大なる關係を及ぼすなしとせず、又幸にして滿蒙問題が解決し日本の經濟的勢力が北滿洲に進出するが如き場合、玆に日露の紛爭を生ずべきは明瞭である。元來ロシヤは北滿洲に相當の經濟的勢力を持つてゐるが、西比利亞の東部諸州及北滿洲は南滿洲を其手に併すに非ざれば經濟的に獨立し能はざる狀況なるを以て、南滿洲進出の希望を棄て去ることは出來ないのである。二三年前東支鐵道機關雜誌に東支鐵道長官の命に依りて執筆せりと謂はれて揭げられたる論文を見ると、日本はロシヤの極東統治及經濟的利益を妨害してはならぬ、北滿洲の經濟的方面に手を出してはならぬと强調し然らざる場合は太平洋戰爭の際英米と協同して、日本を破壞するたらうと威嚇してゐる以て露國の意嚮の一端を察することが出來る、近頃ロシヤは西比利亞沿岸に於ける日本の漁業に對し、惡辣橫暴極まる妨害を試みてゐる、此の漁業問題及其他の問題が種

々様々に纏綿紛糾して大事に至ることなしと誰か斷定し得るか。

三　東亞に對する英米の野望

英米が東亞大陸に其勢力を張り經濟上の大利益を獲得せんとする野心は、久しき以前からであつて、英國は着々其歩武を進めたが、米國が鋒芒を見はしたのは日露戰爭後に屬し、現に餘り見るに足る成效を收めてゐない。去り乍ら彼等は世界大戰の終結するや、世界の最も有望なる最も良好なる市場を支那大陸に發見し、英は戰爭の爲め殆んど戰力を蕩盡し至急埋め合せの必要があり、米は大戰中盛んに儲けて有り餘る金を更に有利に使用せんが爲め、支那に於ける經濟發展に向ひ狂奔を始めた。所が彼等の眼前には日本と謂ふ一大勁敵が現はれた、日本は大戰中に於ける國力の向上と地理上自然の結果として、彼等が戰爭に沒頭し若くは戰爭に對する商賣が手に餘り他を顧みるの餘裕なき時に方り、支那に於て經濟的に大地歩を占め、從來英國の勢力範圍と見られてゐた長江筋の如きも、全然英國の勢力に取つて代はるが如き狀況を示した。

此に於て、彼等相互の間柄は後日の交渉に待つも、差當り共同の敵たる日本を仆すの必要を痛感したのである。故に彼等の爲せし業跡は次の如く大戰後今日迄終始一貫してゐる。

彼等はベルサイユ會議及ワシントン會議に於て、支那の跋扈蹤梁を認容して極力日本を壓迫した。其の結果は經濟公正の原則人種差別待遇撤廢問題の一蹴となり、日本海軍力の不當制限となり、不公平なる太平洋諸島の防備制限となり、漢口陸軍派遣隊の撤退山東の無條件に等しき還附となり、ヤップ島に於ける米國の利權割込となり「滿蒙に於ける日本の特殊權益が、條約上より抹殺され」日英同盟も撤去された。又支那に於ける排日は在支英米人が盛に煽動したことは隱れもなき事實だ。吾人は日英同盟に對し毫末だも未練はないが、日英同盟に依る日本の大戰參加は同盟軍の勝利を導きたる一大素因にして彼等は日本を偉大なる恩人として感謝せねばならぬ所だ、吾等は利に依て恩を忘るゝは決して支那人のみでないと知らねばならぬ、而して米國は其の對支策の關係上日英同盟の存續を喜はなかつた、英國としても對支策上の關係は

米國同樣である。加之英國傳統の制海權は米國が海洋自由論を提げて、急激に膨脹せる偉大なる富力に依り大海軍を建造し、之を破滅に歸せしむる徵候を認めたのと、戰時の膨大なる米國債權の緩和にも必要あり、旁々米國慰留のため日英同盟撤廢と成つたのである。而して英國海軍の東洋に於ける孤立はシンガポール大根據地の築設に依て之を補ふの策を立てた、即ち該根據地は主として日本に對するためである。

倫敦條約は米國の支那大陸に於ける經濟戰の準備を完成したるものにして、西部太平洋に於て日本海軍に對する必勝海軍を準備する以上は、爾後遮二無二横車を押せば希望する所悉く成らざるなしと、彼は自信してゐる。彼は支那に於ける門戸開放機會均等の主義を達成するは、米國海軍の任務なりと公言してゐる。門戸開放機會均等は文字上體裁は好いけれども、吾等は强大なる米國陸海軍が之が爲め準備せられてゐる所以を知らねばならぬ、單なる門戸開放機會均等の爲め斯の如き大袈裟の施設準備は必要でない、即ちモンロー主義を東亞の天地に擴張し、非帝國主義侵略を强行せんとする準備に外ならないのである。元來米國は天然地理上の掩護を受けてゐる、大洋を

隔つる所の諸國から絶對に侵襲を受ける虞はない、南北米大陸の諸國も亦米國に對し何事をも企て得るものではない。然るにも關はらず、彼が如き大陸海軍を擁する所以のものは、其志たる侵略に存するや明にして、平和とか不戰とかいふも全く此れは體裁を飾る看板に過ぎない。一九二二年確立した米國陸軍國防方針の一節に曰く。

元來國防は我國土の保安のみを以て目的を達し得るものではない、從つて各軍の動員及訓練完成せば、陸軍は遠征軍を編成し攻勢作戰も敢行する。

是れ實に侵略企戰圖の暴露だ。

四　太平洋の危機

倫敦條約の終期一九三六年は何を基礎として決定せるや吾人の知る所に非ざるも、露支條約に於て同年は支那が東支鐵道を有償回收し得る時期である、露支條約の權利義務を繼承したる日本は、大正四年の日支條約に於て滿鐵保有の期限を九十九箇年に延長したが該條約は支那の現政府は認めないと言つて居る。彼は從來より國權回復運

動に熱中し、條約及國際道義を無視し、亂暴の行動を敢行してゐる、漢口及九江の英租界奪還の如きは其一例である。而して米國は支那に對し陰に陽に其の機嫌を取りつゝあり、日本壓迫は彼の慣用手段である。故に一九三六年に至らば、滿鐵に對し關東州に對し、支那はいかなる行動に出づるや測り知るべからず。而して米國は嘗て滿洲鐵道の中立や買收を企圖したることもあり、現に支那の機嫌を取りつゝある點よりして、米國が支那を援助することは大丈夫間違なしと見て可ならん。此時に於て日本が無抵抗主義を取り、容易に大陸より退却するならば固より「事なきを得るであらうが」然らざる場合には日本は大決心を要する一大危機に遭遇するのである。米國の支那援助に關しては、嘗て外交家ミラード氏が左の如く政府に建言せる所を以て其一端を想像するに足るべく、而も其建言の趣旨が既に朝鮮に行はれ、大正八年の朝鮮獨立騷動が米國宣教師の煽動に依りたる如きは注目すべきものである。

「米國の外交上重きを置く順序は第一太平洋第二南中米、第三歐洲である、日米戰爭の場合支那をして米國に加擔し日本に對抗せしめ得る實際的方法を講ずるを要す、

シベリヤ及朝鮮に對しても同樣なり。」

而して米國は對支經濟發展の爲め如何なる競爭を辭せず、戰爭をも辭せざる決心にして大々的積極主義なることは既に述べたる處なるも、參考の爲め該國二三年前の野戰砲兵雜誌の一節を掲ぐれば、

日本と米國とは其成立に於て全く相容れず、日本は增加人口の解決を戰爭に訴ふべく、又其主要なる資源及商路を支那に求めてゐる。米國が支那市場より驅逐せらるゝは、商策上の致命傷にして政策の拋棄か勵行か二者其一を撰ばねばならぬ。

要するに米國の對支政策は頗る積極的にして其の競爭者を排斥せんとする信念は殆ど絶對的である。從來米國の爲す所を見れば、國力の强大なるを利用し他國の利害思惑抔には毫も頓着せず、我儘勝手に振舞ふ所の所謂國際的驕兒にして、露國も亦米國以上の橫暴を敢行し、恬として省みざる所謂國際的暴漢である。而して支那に至りては其爲す所事理も秩序も自己の地位境遇も國際慣例も何もかもあつたものでなく、勝手放題に行動する所の所謂國際的狂人である。斯の狂人斯の暴漢、斯の驕兒に依り取

卷かれたる日本は、何時如何なる災難に遭遇するや知れたものでない。世界的識者にして太平洋戰爭の勃發を豫言する者枚擧に遑あらざるは實に宜なりである。佛國の如きは斯の問題に就て利害關係薄くして、最も公正なる看察をなし得る地位にある。その大新聞デペシュ、ドヅールズ曰く

アジヤの形勢は渾沌として、歐羅巴に關する樣な樂觀的見當を付けることは出來ない。アジヤには現に重大なる危險が潜む、太平洋の舞臺からは一刻も眼を放してはならない、之を忽にせんか直に重大なる結果を齎すであらう。

然るに我國の平和論者や流行新聞等には斯の危險を洞察するの眼識を缺ぎ極東に於ける國際政局の現在と其動向の大勢を豫想し得る近き將來と、並に天惠と稱してもよい我國の軍略的地位は、事實果して我國防を左樣な危險にさらしてゐるだらうか等と樂觀してゐる。彼等は彌々戰爭が起つてからでなければ、戰爭の危險が目に見へぬのであらうか。彼等の眼は明治二十七年に日清戰爭の起るを知らずして、明治二十四五年兩度海軍充實費を否決したる我衆議院の眼、又は一九一四年に大戰の起る氣運を察

せずして一九一二年に陸軍擴張案を否決し、且つ一九一四年露西亞が既に全軍の大動員を令し、フランスが動員準備をしても、猶ほ開戰を避け得べしと逡巡躊躇せる獨逸內閣の眼と同じだ。我衆議院の不明は明治天皇の英明に依り救はれたが、獨逸內閣の不明は遂に救はれなかつた、彼等今に及びて速かに其不明を醫せざれば、我國を如何なる悲境に陷れるか判らない。彼等は日本の軍略的地位が良好であるから陸軍の大縮小は危險でないと、素人の大膽極まる盲斷を下してゐる。斯かる長袖者の兵を論ずるは子供が爆彈を弄ぶ以上だ、危險之より大なるはない。彼等の考案に依れば敵軍を內地に引受け陸軍は島國より籠城するに外はない。果して然らば大陸作戰よりも兵力は少くて可ならんも、朝鮮は放棄し國民生活及戰爭遂行に必要なる資源の不足を補充する途はない。加之各島嶼は敵の占領に委し、狹長なる本土は到る處で中斷される。島國籠城策は一擧自滅案だ。我國の今日は知らざる者が知れる振をして何にでも口を出し國家存亡に關する大事を扱ふに遊戲以下の不眞面目を以てする輕佻浮薄眞に唾棄すべき狀態である。

更に外交一元論を唱へ、軍備は外交方針に從屬すべく、外交が平和主義なれば軍備には重きを置く必要なく、外交で何でも出來るかの如く考へる論者に一言する。本章に述べたる如く大戰以後我外交を一瞥するに國家の重要問題は殆ど成功せるものはない。從て外交とは相手の主張に屈從する事の代名詞の如き觀がある。殊に甚しきは支那に翫弄され輕蔑されるのが對支外交の常態と爲つてゐる。斯の如き外交に依賴して國家擁護の重大使命を帶ぶる軍備を減ずることの出來ないことは、三尺の童子も知る處である。加奈太參謀總長マックブリアン氏も

極東に於ける列强の經濟戰を中止せざれば

平和は遂に空言となる。

の一句を述べて聞に米國を諷して居るが米國大統領フーヴアー氏が去二日（昭和五年十二月二日）議會に與へた敎書中の海軍條約に基づく米國の方針を一讀するときは平和は既に空言と爲つて居る曰く

一、ロンドン條約に基く海軍力は十ヶ年計畫で權利を全部實現する（總經費二十億

圓）

一、八吋砲一萬トン巡洋艦十八隻完成を目的とする、從つて同艦の日本の對米比率は六割に低下する。

一、六吋砲一萬トン級輕巡洋艦を若干建造する（十八隻の豫定）

一、巡洋艦の二十五パーセントに飛行機發着甲板を裝置するので東洋攻勢作戰上その實現を期す。

一、潛水艦五萬二千トンの保有量中一萬八千トンは東洋進出作戰上V型の大型を建造し三萬四千トンを以て一千二百トン乃至一千五百トン型を建造する。

一、海軍航空機一千臺計畫は明年度中に完成するので更に第二次計畫を樹立する。

即ち六年有期の條約に依りて十年の權利を獲得し十對六の優勢を以て征日作戰の必然的大勝を確保すと誇つて居るが米國民は之れすら尙小なりとして小言を並べて居る之に對する日本の對策は如何、倫敦條約の兵力量は國防上缺陷あり、補充の方法としても完全の道なし不滿足ながら條約期限內の應急策を考ふるも、最小五億臺の經費を

要すと盛に宣傳せられたのであるが、終に三億臺に暴落し最近左の發表を見るに至つた。

海軍補充計畫の年度割決定（六年度は九百五十萬圓）

海軍補充計畫の年度割についてはかねて海、藏兩省間において種々協議中であるが海軍當局としては今回次の如く決定した。

一、總額　三億七千四百萬圓

一、繼續年度　昭和六年度より昭和十一年に至る六ヶ年

一、年度割　（單位千圓）

昭和六年度	九、五四〇
昭和七年度	三一、四六〇
昭和八年度	七四、〇〇〇
昭和九年度	七九、〇〇〇
昭和十年度	八六、〇〇〇

昭和十一年度	九四、〇〇〇
計	三七四、〇〇〇

即ち米國の五分一にも達せざる小額なるに拘はらず、我政界及言論界に於ては之でも過大なり、負擔に堪へぬとこぼして居る氣宇の大小精神の張弛霄壤の差を以て相離れ到底お話にならぬのである。吾人國民としては政界言論界の諛米宣傳の如何に拘はらず一大決心と奮發とを以て眼前の禍機を未發に征伏するの覺悟が必要である。

第三章　軍備決定の基礎要件

一　國是國策

一國の軍備は單なる經濟問題のみに立脚決定さるべきものに非ずして、其他に研究準據すべき幾多の重大問題がある。斯等の重大問題を除外して單に經濟問題或は一時の都合に依り軍備に大縮小を加へんとする者あらば、國民生存の保障及國家の自衛の

如何なるものかを知らざる迂愚の骨頂だと評すべきである。一國の軍備を決定するには各方面に亘り廣汎なる調査研究を要するも、其主なるものは國是國策、國防及作戰の方針、地理的關係、列國の情勢經濟力等にして、此等の諸件に亘り最も愼重周到なる調査研究を要するのである。

恭しく惟みるに　皇祖肇國の精神は世界の修理固成に在り、世界人類の救濟に在り之が爲め古來日本民族は宇宙を以て、萬有共通の宇宙となし、世界を以て萬邦共存の世界となし、世界正義の中心は我國我國の中心は　皇室なりとし、眞理を以て世界を同化敎導するの大理想大抱負を持つて來たのである。故に日本民族は神代に於ては勿論奈良朝の頃迄は島國に蟄伏してゐなかつた、是れ明らかに歷史の示す所である。而して我民族が支那文化の輸入を初とし世界各國の汎ゆる思想宗敎哲學等の入國に對し、毫も其の侵害を受くることなく長を取り短を棄て之を我に同化せしめ天壤無窮の資料化したのは、實に　祖宗の垂訓に依り宇宙世界及國家の根本中心に關する偉大なる信仰と、不動の自主的精神を有せし結果に外ならず。而して神武天皇は卽位に

際し「六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ふて宇と爲す亦可ならずや。」と堂々と宣言せられてゐる。是れ決して侵略又は征服の意味に非ず、王道を以て世界人類を救濟せられんとの御思召である。何となれば　天皇が同時に「皇祖皇考乃ち神乃ち聖、慶を積み暉を重ね多く年所を經たり。」又「上は則ち乾靈國を授くるの德に答へ、下は則ち皇孫正を養ふの心を弘めん」と仰せられてゐる所に依り、何等疑ふべき餘地はないのである。

正は正義なり眞理を實際に行ふを正義と云ふ、慶は德である、慈善慈愛慈悲の類は皆慶なり是非善惡を區別し正に就く光明を發するを暉と云ふ、即ち智識なり王道とは覇道即ち權謀術數を以て利己排他の行爲に出づるの反對にして、正義と道德を以て人民を治め世界の各國に接することである。我國民族性が平和を愛好し殘忍酷薄を嫌ふことは、古來一貫したる事實にして他國に其類例を見ない。「神代に於ける事實正に然り、而して神は之を只後世子孫に垂示された計りでなく、歷史時代に入りても、無名の師を起し或は侵略戰爭を爲された天皇は御一名も在まさない、代々の天皇は反抗者と

雖も服從すれば皆之を慰撫し安養して其處を得せしめられてゐる。是れ祖先の道を以て將來の文明を世界に寄與しようとするのである。眞理たる斯の道の前には國境はない。斯の道を以て世界人類を救濟しようとの御思召であらせられる。神武天皇の宣言は世界が最も善良なる一の政令の下に在る如く融合協和すること恰も一軒の家庭の如くなり、以て人生を樂ましめようとの御趣旨であらせられる。之即ち肇國の精神であり民族精神であり建國の目的である。天皇の國家が正義慈愛眞理道德智識の優越を以て世界の淵源中樞となり、日本民族の人格文明か世界を超越するに至らば、弱國は我保護を求むるであらう。強國も我に無道を加ふる能はずして心服するに至るであらう明治開國進取の御聖旨も亦是にあることは國民の擧つて拜察し奉つる所である。即ち五箇條の御誓文に於て舊來の陋習を破り天地の公道に基くべしと仰せられた。又御製中にある。

あさみどり澄みわたりたる大空の
廣きをおのが心ともがな

よもの海みなはらからと思ふ世に
など波風のたちさわぐらん

おのづから仇のこゝろも靡くまで
誠の道をふめや國民

いつくしみあまねかりせばもろこしの
野にふす虎もなつかざらめや

人の世のたゞしき道をひらかなむ
虎のすむてふのべのはてまで

は、明らかに斯の大精神を道破あらせられたるものである。

是れ實に　皇祖皇宗よりの日本民族の傳統的大精神であり、日本の國是である、斯の大精神が實現すれば國際聯盟も不戰條約も必要でない、世界的軍縮も自然に實行される。スペインの前首相リヴエラ將軍曰く、

日本は人類進化の先頭に立つべき絶大なる精神力を有してゐる。日本が現在の地位

及固有の道德を保持するならば、必ずや全世界に偉大なる幸福を持來すであらう。と、白人中にも斯の如き知己があるのは實に愉快ではないか、斯の日本民族傳統の大精神大抱負を實現するの使命は吾等の子孫の雙肩に懸つてゐる。故に日本の國策は飽く迄正義的積極進取であらねばならぬ。而して自衛力を强大にして他國の横暴沒人道の行爲を監視し、世界に正義を樹立せねばならぬ。明治以來の各戰爭は皆之が爲め行はれた、國力の充實も海外發展も勿論斯の目的達成の爲めの緊要なる手段である。就中正義に立脚せる滿蒙地方の經濟發展は至急實現せしむべき國是として眼前に横はる大問題だ、此の目的を達するには相當なる軍備の後援が最も必要である。然るに我政戰に於ては　皇祖皇宗の宏謨天業恢弘の道を忘れ、華府に退き倫敦に屈し、陸軍二回の軍縮に慊らず、更に陸軍第三回の軍縮を强行せんとしつゝあり、實に萬古の皇謨を無視し誤まれる平和思想に捉はれ、徒らに目前の經濟問題のみに沒頭し、列國の軍費負擔の狀態と我國費使途の委曲とを正視せず、國民の軍備負擔を誇大に吹聽して一時を瞞着せんとす、其短見寧ろ憫むに堪へたるものがある。

二　國防方針及地理的關係

一國軍備の決定は其國の國防及作戰方針を以て最大要件とする、我國防及作戰の一般方針は前二章の所論に立脚して決定さるべきものと假定し、便宜上亞細亞大陸の一大國と强大なる海軍を有する他の一國との聯合軍を敵とする場合を想定し吾人の所見を述べて見やう。斯の想定に依る研究の結果は東亞の變局に應ずる基本的對策なりと信ずるからである。即ち敵の海軍が著しく優勢にして一大決戰を遠く外洋に試むる能はざる場合に於ては我海軍は止を得ず近海の地形を利用し漸減作戰に依り決戰の好機を獲得することを圖るであらう。此間陸軍の執るべき一般方針如何、攻勢か將又防勢か、抑々防勢なるものは攻勢方面の選定、攻勢の時機及兵力運用に就て、全然敵に自由を與ふるものにして、我は受働的に陷り、勝利を得るの公算甚少きものなれば、兵力劣勢にして如何ともし難き場合に限り採用すべき尤も不利の戰法である。而して防勢は元來地形を利用して兵力の劣勢を補ふ戰法であるが故に、滿洲の如き大平

原に出づれば防者は殆んど利用すべき有利の地形を有せざるに反し、敵は其兵力の優勢を利用して何れの方面からでも來攻し得るを以て、我退路は著大の脅威を受ける之が爲め一旦軍の主力は滿洲に進出しても、間もなく退却せねばならぬことになる。一方海洋方面に於ては敵海軍の封鎖の爲め平生ですら不足する所の國民生活及戰爭必需の原料食糧等を得るの途は全く杜絶するに至るを以て、國内の狀況は大戰末期に於ける獨逸の如き狀態に陷り、終に敗衂の餘儀なきことゝなるべし。而も斯の如き困難の時機に於て、將又軍が一度失敗して朝鮮國境の線より退却したる場合に於て、吾人は朝鮮が如何なる有害物と成るべきかを胸算せねばならぬ。故に我常備軍は戰時大陸に於て攻勢を取るに相當の陸軍を動員し得る如くに整備するを要する。

論者曰く、平時に於ける常備軍を極度に縮小しても、非常時に於て所望の如き大軍を動員し得る準備計畫を立て置けば可なり、大戰に於て英米は之を爲し得たりと。是れ國土の地位及諸狀況を顧みず其能否に關し毫も思慮せざる所の架空的暴論である。英國殊に米軍が平時比較的小なる陸軍を有して滿足し得る所以は、世界最大の海軍力

を有し海上より其國を攻擊し得る國なく、殊に米國は接壤國ありと雖も米國に一指だも觸れ得る國はないからである。大戰に際し彼等兩國は連合軍が歐大陸に於て嚴然として獨逸軍を支へてゐたから、其豐富なる財力と工業力と資源とに依り悠々長時日を費して未教育兵を教育し、恰も賊を捉へてから繩を綯ふの態度にて大陸軍を出征せしむるを得たのである。米國は三年間の長時日を費して僅々二十三萬の常備軍から三百五十萬の大軍を新造せしが、其内戰場に出したのは三百萬人で、眞に戰鬪に從事したのは約百四十萬に過ぎない、之とても精鋭なる佛國の間に伍し、大隊以上の團隊本部及司令部は皆佛國將校の指導に依り、辛ふじて任務を果し得たのである。常備軍を過度に減小するの結果は戰時所望の軍を動員するに長時日を要し、而も其軍は戰鬪力微弱なることは動かすべからざる定則だ。

日本は英米と全く事情を異にし、大陸接壤國である。そんな悠長の事をしてゐるならば、其の間に滿蒙は勿論、朝鮮迄も敵手に落ちる。滿鮮地方敵に歸せば戰時の國民生活は何に依りて保障するか、戰はずして屈服するの餘儀なき狀況となるであらう。

次は戰鬪力及國力の問題である。英米の如き方法を以て戰時急造する軍隊は戰鬪力極めて微弱なるを以て、兵數を增大し敵よりも大に優勢でなければならぬ。此事は我國では頗る至難の事だ。平和論者は戰時は國家總動員だ所望數丈けドシドシ未教育壯丁を召集すれば可なりと無造作に考へてゐるも、未教育者は軍事教育を一通り終らなければ戰場に出せない。特種の技能を必要とする以外の一般兵卒の爲め一通りの軍事教育を爲すは少くも三箇月を要する、假りに戰鬪力が教育日數に比例すと見れば、而も此等急造の兵員は定例の教育を受けたる者に比し六、七分の一の戰鬪力を有するに過ぎない。現に日露戰爭の遼陽會戰前後に於ける我軍の戰鬪力如何に鑑みるも明なる所である。故に斯の如き戰時急造の軍隊を以て戰爭の目的を達せんとせば、却て多數の兵力を要することを覺悟せざるべからず、從て戰鬪上多數の死傷者を出すのみならず、軍費は驚くべく增加し、軍の活動力乏しきが爲め戰爭は瀰久狀態に入るべし、斯の如きは我國力到底之を許さぬ所である。

第一財力資源共に貧弱にして工業力の微弱なる我國が、戰時斯かる膨大なる陸軍を

建造し戰爭に必要なる兵器彈藥軍需品の補充をなすことは不可能だらう。假りに原料は確保され工業力は豐富なりとしても、工業動員が實施せられ民間工場が活動し得るに至るには、米國の例に依るも半年乃至一年半を要し、到底我國では出來ない相談だ。獨り兵器彈藥等軍需品の問題のみではない。長期戰は我國が今から七轉八倒の努力を盡すも資源と財力が許さない。論者の說の如く師團數を半減しても得る所の經費は一年約四千萬圓に過ぎない。如何に技倆卓拔の經濟家ありて此四千萬圓を以て年々國內經濟產業の發展に努力すとも、國家の全力を傾注せる世界大戰の如き長期の四箇年間の戰爭を遂行し得る如く國力を培養し得るは、非常に至難の事であらう。よし夫れが出來るとしても開戰後英米の如く愚圖ついてゐれば、滿蒙は敵手に落つること前述の通りだ。世界大戰が獨逸の自然的崩潰を待て漸く結末を着くるに至つたことは主として平時に於ける英米陸軍の缺陷に起因するものにして、大戰を四年半の長期に引延ばしたのである。英國の如きは之が爲め戰に勝つても國力を蕩盡し、御株を米國に奪はれたのである。帝國は資源乏しく之が補充は國外殊に亞細亞大陸に仰がねばなら

ぬ。之がため何れの國と開戰するも先づ資源の所在地と其搬路を確保することが極めて緊要だ。即ち海岸線を守備すべきは勿論、速かに進んで外敵を擊破せざるべからず然らざれば資源を斷たれ爾後の戰爭繼續も國民生活も共に不可能の苦境に陷る。又戰爭が永續するに從ひ、國民生活は愈々至難となり、遂に敵に屈服するの止むなきに至るだらう。故に英國の如き悠長暢氣なる國防計畫は出來ない。開戰の場合直ちに所要の兵力を出し、速戰速決を圖らねばならぬ。速戰速決の爲には精鋭なる軍備を要する。

若し戰爭永續して增加擴張せらるゝ軍隊の新募急造を餘儀なくさるゝ場合に於て、第一次に使用せらるゝ軍隊は精鋭であらねばならぬ。兵卒の戰場に於ける活動力殊に其戰鬪力が在營年限の長短に比例するは、出戰者の擧つて體驗してゐる所である。現在の青年訓練、學校教練の如きは軍隊教育に効果ありと言ふ程度に過ぎず、決して之に依賴することは出來ない。洋の東西、時の古今を問はず、在營年限の長さは軍の精鋭を期する所以にして、軍の精鋭は在營年限の外に之を求むることは至難だ。然し乍

ら在營年限を現在の儘とするも、在營人員の減小即ち軍備縮小は戰時精鋭軍隊の數を減小する、在營人員を現在の儘とするも在營年限の短縮は軍全體の戰鬪力を減殺する。平和論者の如く常備軍隊に大縮小を加へ、其上在營年限を短縮するならば、二つの不利を併有することに歸し、國軍の實力に至大の缺陷を來すのである。斯の缺陷を補ふには量即ち兵數の多を以てする外はない。是れ常備軍隊減小の歸結である。質を補ふに量を以てするは、教育訓練編制裝備の爲め長き時日と多額の經費を要し、而も戰爭長期に亘るの至大にして忍ぶ能はざる不利を來す。

是れ我國情の絕對に許さゞる所である。又論者中には獨逸が至大なる經濟苦に陷り遂に敗者となりし故を以て將來の戰爭は經濟力が主で軍備は從であると言ふ者もあるが、獨逸が速戰速決を求めて其の戰果を收め得ざりし主因は、兵力の不足にして、政治家の無能社會人心の腐敗も亦大いに與つて力あることを知らねばならぬ。故に戰爭の爲めには依然軍備に重を置かねばならぬ。而して速戰速決の爲めには精鋭なる兵員を必要の數に準備することが大切で妄だりに兵數及在營年限を縮小すべきものではな

いで

陸軍縮小論者中其の重要なる理由として、天惠と稱してもよい我國の軍略的地位は常備軍に大縮小を加へ得べき狀況であると論ずるも、是れ軍略の何者たるを知らざる素人論である。我國大部が島國であり、一部大陸接壤國たるは、優勢なる陸海軍就中懸隔甚しき强大の海軍を有する國々を敵として戰ふ場合に於て、大陸國と兩方の不利を併有するのである。卽ち陸上より直に攻擊せらるゝのみならず、資源不足國の常として、優勢の敵海軍に依り海上交通を阻止さるゝは偉大の痛みである。次に離れ島の應援は優勢なる敵海軍のある爲め至難である、さりとて守備兵なければ、直に占領される、故に此等離島には固着の守備兵を要する。我國は大陸及太平洋方面航空機に依り到る處を攻擊される。就中ハワイ及アリューシャン群島は米國の爲めに利益を與へ、我に不利益を與ふること甚大なるものがある。卽ち此の二地は敵海軍及空軍の根據地として我本土を荒らす爲め最も有利に利用さるゝも、我國には米大陸を直接に襲擊し得べき根據地はないのである。而して我國建築物の大部が木造なることゝ相待ちて、

防空の爲め大なる兵力を要する。我國の地形狹長なると脊梁山脈の縱走と海岸線の長大なるとは、纏まりたる地形にして交通便利なる國に比し、大なる守備兵を要する。故に我國は國防上の天惠と認むべきもの皆無にして、寧ろ不利益のみを持つてゐる。斯の如きは決して陸軍縮小の理由とは成らないのである。

三　軍備と經濟

近時の交通は著大の發達を來し、時間的に距離の縮小を齎し、世界は愈々狹くなつた。斯の關係は各國民の交際に益々緊密切要の度を加へ、各國民をして廣く世界の各地方に發展せしめ、就中經濟關係の廣汎と爲れる爲各國の利害關係は彌々複雜錯綜を來した。從つて二國間に惹起せる紛爭も一國對一國の係爭を以て終始するは稀にして數國相關聯せる戰爭を生起する傾向あり。又戰爭の進行中に於て關係に種々樣々の數變轉を來し、豫想外の國が敵側に加はることあるべし。前章では主として日對露及日對支米の關係を論じたが、嘗て日本が露國に勝ちたる影響として印度埃及及ヒリッ

ピン、印度支那等の獨立熱を刺戟し。人種的偏見の旺盛なる白人諸國に一種の警戒を與へ、殊に濠洲ニュージーランドの日本を畏怖するあり、支那に對する經濟關係の濃厚なるよりして、英國が大陸の一國と提携するは將來必ずしも絶無なりと判決するを得ない。故に單に隣邦の狀態のみを以て自國の兵力を決する能はず、廣く列國の情勢を看取顧慮するは特に必要である。然るにそんな場合を想像するならば所謂六大神通力でも持合せざる限り人生安立の地は遂に發見し能はぬとの結論に落ちようと、或る論者は漫語してゐる。吾人は渾沌たる現代に處する國防問題を斯の如き單純極まる主張に一任して晏如たり得ない論者の所論は既に大戰慘敗の獨逸に於て經驗されて居る。

獨逸參謀總長は一九〇五年及六年に於て糧食を調査し長期戰に應ずる準備を政府に提議したが、先見の明なき政府はルーマニヤを味方とし得べく、又オランダを經由し米國に至る通路は閉鎖せられざるべしと樂觀して之を容れなかつた。何んぞ知らんルーマニヤは勿論米國でさへ遂に敵と爲り、同盟國伊太利も亦敵となつた。參謀總長は

又一九一二年三軍團の軍備擴張案を政府に提出した、此案たる夙に內外の大勢を洞察し豫想敵國を判定し、彼我の兵力を精密に算定したるものにして、既定作戰計畫の遂行に必要なる獨逸野戰軍の兵力要求である。然るに目前に迫りつゝありし大戰も政府惰眠を覺ますを得ず當時獨逸の財政は十分の餘裕ありしに拘はらず遂に政府の否決する所と爲つた。

一九一四年八月中旬に入るや、露軍は東普方面に作戰する獨第八軍に對し、三倍に近き優勢を以て東普地方に侵入して來た。第八軍にして失敗せんか、獨都伯林は頓が て露軍の蹂躙する所となるべく、東方正面の危急言語に絶するものあり。玆に於て獨軍最高統帥部は西方國境附近の會戰を終るや、直に二軍團騎兵一師團を第八軍に增加の爲め東方に轉用した。獨軍が若しも斯の兵力を引續き西方に使用せしならば、佛軍の巴里附近に向つてせし退却の追擊は一層猛烈を極め、壞亂に終らしめ得たでもあらう。殊に又次で起りしマルヌの會戰は獨軍兵力の不足より其右翼を包圍せらるる形勢に依り失敗したが、東方に兵力を轉用せざりしならば、第一に佛軍がマルヌの線に踏み

止まり得しや否や疑はしきのみならず、該會戰の勝利は斷然獨軍に歸せしなるべし。果して然らば西方面の戰爭は速かに終局し、ルーマニヤ伊太利が敵と爲るの機會起らず、饑餓に堪へ長期戰に入ることも無かつたらう。換言せば一九一二年參謀總長の三軍團擴張は戰時の六軍團增加を意味し、開戰の初頭東方面の危急を緩和し、西方の赫々たる戰勝を以て速戰速決全勝の榮冠を戴き得たらんに、政治家が機を見るの活眼なく、單に經濟的方面にのみ沒頭し、遂に國家を慘憺たる悲境に陷れしは所謂一文惜みの百損にして獨逸の爲めに悲まざるを得ず。

經濟一天張陸軍縮小論者は言ふ、戰爭の爲めには莫大なる財力資源を要する如何に强大なる軍備を擁しても財力資源の之に伴ふに非ざれば、戰爭は出來ぬ。故に財力資源を培養し國力を充實せざるべからず、國力即ち國防力なり。斯の國防力を枯渴の狀態に置き尨大なる軍備を整ふとも、用を爲すものでない。故に我國の陸軍は大縮小を要すと、之に對し軍備擴張論者ありて如何に財力資源豐富なりとも、軍備なき國に國防力があるか、論より證據微弱なる軍備の國は開戰と同時に一擧に壓倒されて居るで

はないか故に現在の軍備大に擴張すべしと言はゞ、兩者共に論據なき極端論であり水掛論であつて何時迄論じても結着するものでない。不幸にして現在我國に流行する陸軍縮小論は概して前者に屬し、具體的研究を盡さゞる穴だらけの感情論であり、即ち此等流行論は一國の軍備を決定する諸元に就いての研究は殆んど皆無であつて只經濟財政の見地のみより立論し、其の經濟財政と軍備の關係に於ても重大なる偏見誤謬がある。夫れは後章に於て指摘するも玆に軍備と經濟財政の關係を一言すれば、原則として兩者は終に調和を得ねばならぬのであるが、國家生存の保障たる軍備の充實に對しては一國の財政計畫も變更さるゝことあらねばならぬ。吾人は國家の經濟力を以て間接の軍備充實だと言ふことは、之を肯定すると共に國家の獨立と國民生活の保障は軍備の儼存に依りて確保せられ、國家經濟力の發展も亦强力なる軍備の後援に俟つもの多しと主張するのである。若し夫れ國家財政上僅小の國難を口實として國家の生命を托する軍備に大縮小を加へ、國防力の缺陷を念とせざるが如きことあらんか。其の節約し得たる經費に數千倍數萬倍する所の國幣を犧牲とするの憂目に陷るなきを保せ

ず。故に軍備のため必要なる經費は他を節約しても之を支出するのが萬國共通の原則である。

四　常備兵額と戰時所要の兵力

第二章に於て論究せし如く我國と開戰の見込濃厚なる國は米支露の三國で、其外に我國が三國の一と開戰の場合敵側に加はるべきものなきを保せざるも、三國は我國の假想敵國として十分の價値を有す。而して支那若くは露西亞と世界最大の海軍を有する米國と聯合せしものを假想敵國として想定するを至當とすべし。支那は現在總計約二百萬の兵力を有してゐる。支那の軍閥は時として敵對の狀態にあるも我と兵を構へたる場合に於ては擧國一致我に當るものと見るを可とす。支那軍が民國元年より二十年に近き毎年の內戰に依て實戰的に訓練せられ頗る勇敢なるは、近年の諸戰鬪に依て證明せられ、殊に濟南事件に際し、濟南城壁上に密列せる我機關銃陣地に向ひ、其雨射する狹長なる城壁上より反覆數回の突擊を行ひ、悉く全滅せしが如き勇敢さは驚異

に値す故に之を聯合する强大國が指揮官兵器軍費其他特種部隊等を以て援助する場合には其戰鬪力は列强の軍隊と大差なきに至るべし。而して支那二百萬の平時軍隊は戰時更に增員し得べきが故に、其野戰軍として直に使用さるべき兵力は少くも百五十萬を下らざるべしと算するを至當とす。

露西亞は最も徹底せる國民皆兵主義の國にして、平時兵力約百十萬を有す、近年連に國民の軍隊化を呼號して一般國民に軍事教育を實行しつゝあり。故に相當の動員力を有すと見るを至當とす。露軍の編制裝備は我よりも優秀なり。而して日露戰役末期に於て露軍の極東に在りし兵數は百萬に近し爾後交通の發達せし關係は更に多くを極東戰場に輸送し得べきを以て、露國が極東に於て我國に對し使用する兵力は少くとも百萬と見るを得ん。

以上の如く判定するときは我野戰軍の兵數は支那に對しても露西亞に對しても最小限百萬を要す。蓋し我野戰軍は速に敵を擊攘して遠く前進し廣大なる地域を占領し該地域の資源を蒐集せざるべからず。其蒐集は軍隊の强制力に依るに非ざれば目的を達

し難し。故に野戰軍後方連絡線及占領地守備のため相當の守備軍を要す。次に都市及要地の空襲に對する防備並に國民保護に任じ且つ沿岸島嶼及要塞の守備に當たる國土守備軍を要し、又別に野戰軍及守備軍に對する缺員補充に任ずる補充隊を要す。該補充隊は教育專門の軍隊なるを以て國土守備軍の任務を兼行せしむるを得ず。

近世の戰爭にして第一線野戰軍が遠く內地を離れて作戰し、國土及野戰軍後方地域に多數の守備軍を要する場合に於て、陸軍の總人員は第一線野戰軍の四乃至五倍に達するを例とす、其の最も顯著の實例は奈翁のモスコー遠征にして佛國を發する時の總員六十萬がモスコーに達せし第一線軍は十二萬に過ぎざりき。我國の將來戰に於て內地と第一線野戰軍との距離は奈翁のモスコー遠征を凌駕するを要すべく、而も國土及占領地に莫大の守備兵を要するは既述の通りである。此等陸軍所要人員は具體的に計算し得べきも其の發表は軍機の許す所に非ず。上記標準に依り第一線野戰軍を少くも百萬とすれば、陸軍總員は少くも四百萬乃至五百萬と成る、此總員中には輸卒隊補充隊の要員の如き未教育軍人及占領地に於ける鐵道電信郵便其他病院等の勤務に要する普

通人を含んでゐる。斯の未教育軍人及普通人の割合を多きに見積り總員の半數に達すとするも既教育軍人の所要數は二百萬乃至二百五十萬と成る。

現在我常備軍一年次の兵員は十萬なり、而して現役豫備役後備役第一國民兵役二十年次の總數は二百萬と爲るべきも、死亡癈失不具病氣に依る減耗員及病氣所在不明等の事故に依る不應召員並に工業動員の爲め陸軍に使用する能はざる人員は其總數十萬に達するが故に、既教育軍人の戰時得員は百數十萬に減小す。之を前項戰時所要人員に對比すれば結局數十萬の不足を生ず、この計算の基礎たる野戰軍の總員は大に控目に計算せるものにして、又戰時所要人員中の既教育軍人數も過小有利に計算せるものなれば、實際に於ては更に多くの不足を生ずべし、玆に於て現在陸軍の常備兵數は國防に要する最小限度に達せずとの結論に到達する。

第四章　陸軍常備兵數及陸軍費の列國比較觀察

一　各國の常備兵力

國家の世界的地位を顧慮せず一意に列國現有の兵力を比較して一國の軍備を論ずるは無意義極まる無用の努力であるが、往々之を以て軍備の理由とする論者あるを以て本章では我陸軍が列國陸軍との比較上如何なる狀態、如何なる關係にあるかを看察して見やうと思ふ。

日本　約二十萬　　軍備整理前約二十九萬

支那　約二百萬

英國　三十四萬九千九百　戰前三十八萬八千

內譯　正規軍二十一萬五百　地方軍十三萬九千四百外に空軍三萬二千　海外自治領軍隊四十六萬九千あり

米國　三十一萬五千七百　戰前二十三萬四千

內譯　正規軍十三萬四千五百　護國軍十八萬一千二百

佛國　約五十六萬五千　戰前八十四萬

伊國　三十九萬　戰前三十萬

外に空軍一萬一千四百

獨國　二十五萬　戰前八十四萬

內譯　正規軍十萬　警察隊十五萬

露國　百九萬二千　戰前百三十萬

內譯　正規軍五十六萬二千國家保安部の軍隊約十三萬

民兵部隊兵卒四十萬

右に依れば列國中日本の陸軍は最小だと言へる、英米二國は國土の地理的關係より他國陸軍の攻擊を受けざる地位に在り、殊に世界第一の海軍を有する關係上日本と比較すべきものではなからう。戰後國際聯盟不戰條約等連りに平和の聲高く、軍縮も盛

に絶叫せられてゐるが、我國の如き陸軍大縮小を自發的に斷行せる國は他に類がない。獨佛二國の戰前よりも減少されたのは獨逸は强制され、佛國は獨逸の減兵に依る自然の結果であるが、其の經費は却て增加され、最新科學の粹と最新兵器とを以て戰鬪力を充實せることを思はなければならぬ。米國伊國は却つて戰前より擴大してゐる。一般の均合から言へば日本は最早縮小の最大限を實行してゐるのである。

斯の列國平時兵力の計算に就て世間には大なる誤解あり、本調査の如く英の地方軍米の護國軍を平時兵力に入れるならば、我國の學校敎練青年訓練の履習者の如き假令性質を異にするとはいへ全然除外し得ぬであらう抔と言ふ者もあるから、大體の說明を加へて置く、英國地方軍は團隊に編成され、團隊の骨幹は常置され、兵卒は四年服役にて其敎育回數は

第一年度　四十五回と野營八日乃至十五日

第二乃至第四年度　毎年二十四回と野營八日乃至十五日

にして、我平時兵力と比較することは多少の議論あるべきも、之を我學校敎練や青年

訓練と同視して除外せんとするは更に大なる不合理である。我國の在鄕軍人に相當する者は正規軍のためには豫備軍及補充豫備があり、地方軍のためには地方軍豫備がある米國の護國軍も英國地方軍と同趣旨に依り、平時兵力に加ふべきものである。米國護國軍は步兵師團十八騎兵師團四にして、兵卒の訓練日數は毎年百四十四時間以上とし、外に夏期に十五日あり夏期は主として野營を實行してゐる。

獨逸の警察隊は編制裝備訓練の程度正規軍に準じ小銃は勿論機關銃迫擊砲裝甲自働車飛行機を以て裝備され、警察勤務のためには外にも機關があるを以て、全然平時兵力として取扱ふべきものである。

露國の國家保安部軍隊は純然たる軍隊として兵役法に明示せられ、其の素質訓練は正規軍よりも遙かに勝れ、在營三乃至四年にして赤軍の中堅を爲し、編制裝備も亦他の赤軍と全く同一である。民兵兵卒は五年間に八箇月乃至十一箇月（兵種に依り區別す）在營制にして、其編制も正規軍同じく幹部を常置し各民兵は各々所屬部隊を有する所の平時部隊である。

我國に於ける學校教練青年訓練の如きは各國共以上掲ぐるものゝ外、別に學生及青年に對し實行せられてゐるのである。

右の實情を知らずして只我陸軍の過大を感ずることが先入主となり、甚だ妥當を缺くの議論がある該論者は

英國に就ては正規軍より一萬と印度軍を除外し、殊に三萬二千の空軍を計算に入れず、尚ほ海外自治領兵員三十七萬七千を全然顧慮外に置き、露國に就ては民兵部隊兵卒四十萬を除外し

伊國に就ては憲兵及空軍七萬六千と外に尚一萬四千を減じて三十萬と計算す。

斯の如き如何なる根據に依り如何に調査せるやを知らざるも、疎漏の譏を免れない

而も論者は次の如く論じてゐる。

苟くも國民の負擔力に顧みて國防經濟化の妥當性を認識するに於ては少くとも英米なみまで縮小の可能性なしとは言へぬと思ふ。否我陸軍を英米なみに引下げたとしても米が十三萬六千の正規軍を以て一億一千萬の國民を護るよりは尚ほ比率が高い

のである。又英國の平時兵力を我陸軍省調査の如く三十四萬人と計算したとしても彼が東西兩半球に亘る廣大なる領域を標準とすれば我二十萬は矢張り特級的に考へられる。

此議論は國家の特種地位も隣國に在りて事を構へんとする虞ある國の兵備も各國の有する海軍力の關係も其他一國の兵備に關する一切の事柄を顧みず、只領土の廣狹と人口の多少と經濟的關係の外眼中になき無稽の議論にして、自己の立論に都合よき如く英米の軍備を過少に計算せる偏見論に過ぎない、苟くも一國の大事を論ずる者最も愼重に尤も公平であらねばならぬ。

二　國費國富及國民所得と陸軍費との關係

本題も軍縮の理由としては第二義に屬すべき問題なるも論者は、之を以て唯一の論據とするを以て聊か應酬の勞を取つて見たい。論者は附表に於て我國の軍事費が歳出總額に對する百分比二八にして列國中最高率を示し居るを指摘し、軍費は大に削減せ

ざるべからず。就中陸軍の縮小及經濟化に關する輿論は高まりつゝありと絶叫してゐるが、收入同一なる甲乙二人あり毎月甲は四百圓を乙は五百圓を以て生活費とす、而して其内甲は百圓を乙は百拾圓を交際費に充つこの場合生活費に對する交際費の百分比は甲は二十五にして乙は二十二なり、之に對し某論者の議論は甲の交際費は多きに過ぐ減少せざるべからずと云ふに同じ、何んぞ知らん乙の交際費は却つて甲より多額なるを、眞に軍費の軍民負擔に對する輕重を論ずるは頗る困難の問題である。國民は軍費として負擔する譯でなく全國費が國民の負擔である。國費を軍費に振り向くるために負擔の關係をも考慮せざるべからざるは勿論なるも、國家の存立に特有の條件を有する國防上の要求に是非必要ありとせば他の國費を節約しても軍費を所要の程度に達せしむべきである。殺人强盜の不安に襲はれつゝある都市の警察費が多大の計數を示すを見て是等の恐なき無事平穩の都市と均しく其の警察を削減せよと云ふのは不合理千萬ではないか。又個人でも前途の發展を廣き範圍に求めんと欲する者は、交際費の如き多額を要するであらうが隱退自屈世間と沒交渉の生活を送らんと欲する人は交

際費の如き殆ど要せぬであらう。之に對し甲を非なりとし乙を可なりとするの議論は成立たない、國家も亦此の如く其軍費は國防上國家の目的に添ふ如く決せなければならぬだらう。殊に論者は特別會計との關係を顧慮外に置けるを以て議論の根據甚だ不確である。

强いて各國を比較して軍事費の負擔如何を論じようとするならば、國富及國民所得を基礎として研究するのが至當だらう、附表に依り國富及國民所得に對する各國の陸軍費の比率及其順位を調査すれば左の如し。

	國富に對する比率	同順位	國民所得に對する比率	同順位
日	四四七の一	五	五七の一	四
英	五七六の一	六	一〇七の一	六
米	九七七の一	七	一八三の一	七
佛	一七二の一	三	三六の一	二
伊	一六八の一	二	四〇の一	三

獨	二九八の一	四	一〇三の一
露	一〇〇の一	一	二〇の一

右順位は負擔の重き順位にして、國富の關係にて日本は露伊佛獨よりも陸軍費の負擔輕く、國民所得の關係にては露伊佛よりも輕し、又附表に依れば國富に對し陸軍費一人當りの比率は露伊佛獨英よりも少く、國民所得に對する一人當りの比率は露伊佛よりも輕し、其他同表に依れば陸軍費と總豫算との比率に於ては、獨逸を除き日本が最小だと言ひ得べく、陸軍費國民一人の負擔額に於ては日本が最小である。之に依るときは大體に於て日本國民の陸軍費負擔は七國中英米を除き、其他の五國中で最も輕きものだと言へる、然るに論者は、

「尤も軍事費負擔の輕重を單に國家の政費と比照しただけでは、必ずしも妥當なる推定を下し得るものとは限らない。それは更に國家の富力國民所得及貿易額等とも對照しなければ不充分であるとの見解も成立つ、然るに今是等の何れについて概觀するとも、日本國民の軍事費負擔額が輕いといふ事實は不幸にして一も立證されざる

のみならず、却つて其反對の事實が强く吾々の眼を射るのである。

此論の前段は軍費に對する軍事費の百分比は、日本が最大なるを以て軍事費の負擔を輕減せざるべからずと、先きに論斷せし所を自ら覆すものにして、後段は何に依りて調査せるか、我國の國富及國民所得の關係より見て日本國民の軍事費負擔の輕重如何は前述の通りにして、貿易額に依りて判定するが如きは妥當であるまい。要するに論者は我國と英米とを比較し、英米と同樣に國民の陸軍費負擔を輕減することを希望するのであるが、我國と英米とは國家の地位國情が根本的に相違してゐる。英米の爲す所を以て我國に求めんとするは、恰も馬と犬との使命を同一視するの類だ。我國として獨自の使命があり、獨自の事情がある。其使命と事情に於て必要なれば、或る困難を忍んでも之を達成せねばならぬ、陸軍費の問題に於て强ひて外國に類似の國を求むれば、英米に非ずして佛伊である、佛伊の國防に關する熱烈さを思へ。

倫敦條約は海軍の兵力量に於て、米國には對日進攻の勢力を許るし、日本には對米專守の勢力をも許るして居ない。國防上より見て兩國の立場は此の如く其利害を異に

して居る、之を同一標準に置て陸軍々備の多寡を論ずるは一文の價値なし。

三　國費總額と陸軍費の關係及其增減の觀察

先に述べたる通り論者は我國の軍事費の國費に對する百分比が、二十八パーセント（陸軍費は十三パーセント）なるは世界の最高率である。故に軍事費は減額せざるべからず陸軍費に於て殊に然りと、我軍事費及陸軍費の過大なることを大聲疾呼してゐるが、之を善意に解するも不明事理を辨へざる者であり、普通に見ればペテン式欺瞞手段たるを免れない。即ち右國費總額なるものは一般會計に屬するものゝみにして、昭和四年度の豫算では十七億七千萬圓である、特別會計に屬するものは其金額更に大にして兩者を合したる總國費、即ち純計豫算は三十八億一千萬圓である。其の半額にも達せざる一般會計のものと陸軍費二億三千萬とを比較すれば、陸軍費過大なりとの感の起るは勿論である。然らば特別會計の國費とは如何なるものか、其主なるものを擧ぐれば、鐵道省朝鮮臺灣南洋滿洲等の豫算にして其他にも各種のものがあるが、之

を陸軍費と比較する爲めの國費より除外すべき理由はないのである。否之を加へないのは大なる誤りである。陸軍は朝鮮臺灣滿洲にも駐屯してゐる、海軍は總ての各地方の警備に任じてゐる、然るに軍事費及陸軍費には是等一切を計上しながら、國費からは前掲特別會計に屬するものを控除して居るではないか、英國の如きは正規軍中印度に駐屯する約六萬の軍隊に係る一切の經費を、印度の豫算に計上し本國のものより除外してゐるが、若しも此方法に依り兩者の比率を比較せんとせば、我軍事費中より朝鮮臺灣南洋等植民地其他の軍務に要する一切の軍事費を、控除して其の比數を求めねばなるまい。

軍事費が國費に對し如何なる割合に爲つてゐるかを正確に求むるためには、純計豫算に依らねばならぬ。純計豫算とは一般會計と特別會計との合計から繰入れ、其他の關係で重複した額を差引いたものである。昭和四年度の國費（純計豫算）三十八億一千萬圓軍事費、即ち陸海軍費五億萬圓、陸軍費二億三千萬圓の額で計算すれば、國費に對する割合陸海軍費は約一割三分、陸軍費約六分である。之で軍事費及陸軍費がど

うして過大なりと言へようか、兇賊横行するも之に對し何等の取締も制裁も行はれざる世の中に於て、一年支出金の一割三分を割いて生命の保障が確かに出來、又之に依て水陸の交通生業が安易に出來るならば、誰でも此一割三分就中陸上の保護として六分を支出するに吝なる者は一名もないだらう。論者は又陸軍費が年々増加するとて、殊更に昭和二年より四年迄三年間の統計を示してゐる、成る程斯の三年間は論者の言ふ通りだが、今少しく廣く觀察すれば必ずしも論者の言ふ通りでなく、寧ろ偉大なる増加を來してゐる者は左表の如く一般國費であるに心付くのである。

一、明治二十六年度以降の陸軍費海軍費及一般國費

年度	一般國費	陸軍費			海軍費		
		經費	一般國費は對する割合		經費	一般國費に對する割合	
明治二六	八四、五八一、八七一	一四、七二一、二二六	一、七		五、一四一、四五七	〇、六	
二七	七八、一二八、六四三	一〇、四〇八、九五五	一、五		四、五七五、六〇五	〇、六	
同 二八	一〇〇、〇一五、九三四	一四、九一五、二四三	〇、六		四、九一五、二四三	〇、六	
同 二九	一六八、八五六、五〇八	五五、一四二、五三四	三、二		七、三五一、三二九	〇、四	
同 三〇	二三三、六七八、八四四	六〇、一四七、九八八	二、二		九、五四三、八八八	〇、四	
同 三一	二一九、七五七、五六八	五五、八九七、六五三	二、五		五八、五二九、九〇一	二、七	
同 三二	二四四、一六五、五三七	五三、五五一、一九七	二、一		六一、六六一、六一〇	二、四	
同 三三	二九二、七五〇、〇五八	七四、八三八、二〇一	二、五		五八、二七四、八九五	二、〇	
同 三四	三六六、八五六、八二四	五八、三八一、七七九	二、二		四三、九七九、五二七	一、八	
同 三五	二八九、三二六、七三〇	四九、四四三、〇五九	一、七		三六、五二六、一八八	一、三	
同 三六	二四九、五九六、一三一	四六、八八四、五六三	一、九		三六、〇八七、八五六	一、四	
同 三七	二七七、〇五五、六六二	三三、〇八八、〇五七	〇、四		三〇、六二三、二二八	〇、七	
同 三八	四三〇、七四一、二〇四	一一、一〇九、一九〇	〇、五		二三、四二一、九四〇	〇、六	
同 三九	四六四、二七五、五八三	六七、八六九、五五三	一、五		六一、八七八、六七〇	一、三	
同 四〇	六〇二、四〇〇、九五九	一二六、〇四三、七二六	二、一		七二、二七二、三一九	一、二	
同 四一	六三六、三六一、〇九三	一四一、八〇五、一八一	二、二		七一、五七八、四四七	一、一	
同 四二	五三二、八九三、六五五	一〇六、一六六、〇〇一	二、〇		七一、〇四六、三九一	一、三	
同 四三	五六九、一五四、〇三七	一〇一、五三三、五五六	一、八		八三、八四〇、五三三	一、五	
同 四四	五八五、三七四、六一三	一〇四、九九九、九〇五	一、八		一〇〇、四六三、六一七	一、七	

同大正元	四五	五五、五九六、四四四	一、〇四、一三五、五八八	一、八	九五、四八五、一五九	一、六	
同二	五五	五七五、六三六、九二五	九五、四四〇、二四八	一、七	九六、四四五、五九一	一、七	
同三	五五	六四八、四二〇、四〇九	八七、六九九、九七八	一、四	八三、二六〇、〇〇五	一、五	
同四	五五	五八三、二六九、八五二	九七、七九一、二三一	一、七	八四、二七六、九二五	一、四	
同五	五五	五九〇、七九五、三五五	九四、八一三、五七六	一、六	一二六、六三五、一一七	二、〇	
同六	五五	七五五、〇二四、二五一	一二五、四三六、五七五	一、七	一六二、四三五、〇八四	二、二	
同七	五四	一、〇〇七、〇五五、五四四	一五三、〇八一、九五八	一、五	二一五、九〇三、三八九	二、一	
同八	五〇	一、一七三、三三八、五〇四	二三〇、二六八、〇三八	一、九	五二六、四一九、〇八〇	二、七	
同九	五九	一、五五九、九七八、二五五	二四六、五五六、七三八	一、八	四〇五、二〇一、九四五	二、〇	
同一〇	六一	一、四八九、八五五、六一五	二四六、九七八、六六四	一、八	四八三、五六九、七二二	二、二	
同一一	六八	一、四二九、六八九、六二一	二三〇、九〇八、七三五	一、六	五七三、八九二、四四九	二、六	
同一二	七〇	一、五二一、〇五〇、五〇五	二三五、九二七、〇六五	一、五	二七五、一四四、三六〇	一、八	
同一三	七五	一、六三五、〇二四、〇七三	二〇六、七五四、八一五	一、五	二四八、四四八、一八一	一、五	
同一四	八〇	一、五三四、九八八、五八九	二一四、八〇五、〇一七	一、四	二三九、〇〇五、一六五	一、五	
同昭和元	八五	一、五七八、八二六、四三五	一九六、九四一、二一五	一、三	二五七、五〇七、六六九	一、五	
同二	九〇	一、七五五、七三三、〇六〇	二八、一〇三、六五四	一、二	二七五、五六一、二七七	一、五	
同三	九四	一、八一四、八五五、〇一一	二四九、一〇六、一八四	一、四	二六八、一三一、四八五	一、五	

同四	五	一、六八三、二四六、二〇八	二三一、九一九、四八九	一、五	二六一、一〇八、八八九	一、六	
同五	五	一、五五〇、六七六、九二五	二〇〇、八六八、一六六	一、五	二四三、九五三、二〇四	一、六	

備考

一、昭和三年度迄は決算額昭和四年度は實行豫算額昭和五年度は實行豫算改定額による

二、明治二十七、二十八、三十七、三十八、大正三年度に於て軍費の著しく減少しあるは戰役の爲め臨時軍事費を使用したるによる

一般國費は其額に於て尨大なるのみならず軍費の如く直接國家の生命に關係するものではないから、大に之を節約する餘地がある、此關係は附表第二を見れば明瞭だ。國費三十七億に加ふるに地方費約十五億を以てせば其總額當さに約五十二億と爲る。此五十二億中より三億や五億の金は遣り樣に依つて直に浮いて來る。區々たる二億の陸軍費を切つたからとて血の出る餘地はない。若しも必要ありとせば國費地方費を大々的に節約して國民の負擔を輕減するのが當面の急務だ。

陸軍程節約に節約を重ね繰延を重ねた所は他に其類を見ない。今日の陸軍は經費の

關係より其充實を遲延し列强中最劣等の編制裝備に墮して居る、之を改良充實するは尤も緊急の要務であるが軍備削減を前提としての整理ならば何事も成し得ない。陸軍の機關及軍隊にして全然之を廢止して可なるものは一として在存せざるも、事の輕重大小は固より存す。其內容を改善せんとせば比較的輕少なる問題を犧牲として尤も必要なる所に其力を集注せねばならぬ。假に此の方法に依り若干の經費を捻出したとしても之を以て我陸軍の現代化に貢獻する所は僅に所要の一部を充たし得るに過ぎず、陸軍費を節約減少して之を他に振向けんとするが如きは甚しき過望にして大なる誤想なりと謂はねばならぬ。

第五章　陸軍の缺陷と充實

一　現有師團の本質

日露戰役後に於ける我陸軍は常備十九師團であつたが、露國の復讐戰に備ふる必要

ありて平時二十五師團を整備すべく明治天皇の御裁可を經て計畫された。斯の計畫は國家財政の都合に依り漸次實現することに定まり大正の初頭に於て二師團を增加し、朝鮮警備の緊要なるより之を該地に配置された。而して爾後歐洲大戰の關係と露國の革命に依り當分の間日露間に交戰の危險なしとの判斷に基づき殘餘四師團の增設は其儘保留せられたるのみならず、却つて世界大戰後の平和熱の勃興と我國財政難の關係は大正十一年約五個師團に應ずる人馬の減少及大正十四年四個師團の廢止を現實するに至つた。斯の兩度の軍縮は人員總計約九萬に及び、其縮小の偉大なる列國に類例なきことは既に前章述べたる通りである。又世界の大勢は其後著しく變化し列强の政治經濟軍事外交上爭覇の中心點は太平洋に移り、一朝有事の場合、我國が少くも百萬の第一線野戰軍を要することも是亦前章研究せる如くである。斯の第一線野戰軍を戰時動員せんがため、普通の方法に依るならば常備軍二十五師團を要す。恐らく日露戰役後の二十五師團計畫は該戰役末期の極東存在の露軍兵數より打算し、爾後の日露戰爭の場合に於ける露軍の極東に使用すべき兵力は、百萬以上なりと推定せる結果なるべ

し、故に今日の狀況に於て我國の財政上餘裕ありと假定せば國防に忠實なる人士は誰でも二十五師團の常備軍を以て過大なりとする者はないであらう。

師團は我國陸軍の戰時動員の骨幹にして野戰軍の主體である。師團を動員するに常備師團なき場合は大なる困難を伴ひ、又一常備師團にして三個以上の師團を動員するは殆んど至難に屬す故に戰時所要の師團數に順應すべき常備師團數を妄りに減少すべきものでない。而して野戰に於て師團外の諸部隊は主體なる師團の作戰行動を補助すべきものにして自ら野戰の主體たり得るものでない。我國の師團の常備數は目下十七個であるが、大正十一年の軍縮に依り、從前の編制に比し三割三分の缺陷を生じてゐる。具體的に言へば、一師團內に於て步兵は四十八中隊騎兵工兵は各三中隊野戰砲兵は九中隊ありて師團としての働きを完全に發揮すべきものであるのに、各兵共其三分の一を缺き、結局三割三分の力を失つてゐる。之を完全師團に換算すれば十一師團半となり、世間では常備師團十七個ありと見るも、內實は十一師團半の實力しか持たないのである。尤も師團外の補助部隊は日露戰爭當時より可なり增加してゐるも、戰時

の主體たるべき師團は寧ろ日露戰爭當時より一師團半少き狀態にある。而も將來戰は日露戰爭の如く、一國對一國の戰爭よりも數國連合の敵と戰はざるべからざる公算多く、且つ長期戰は極力之を避け、速戰速決に導くは我國情上絕對の必要を認むる所なれば、始より所望の强大なる兵力を第一線に出すを要し、軍隊の素質は一層の精銳を望むに方り、常備師團の個數及其實力が斯の如くなるは國防上大缺陷である。況んや更に多數の師團を廢止せんとするが如きは國防を輕視するの甚だしきものである。

斯く論ずるも師團を補助して其戰鬪力を大ならしむべき師團外の諸部隊は、其後增加又は新設せられたるを以て、吾人は敢て我陸軍全體を通計しての戰鬪力が日露戰爭當時の陸軍より劣ると言ふのではない。師團數を恰も弊履の如く無造作に減少するの害を憂ふるのである。而して玆に最も注意著目を要する一事は、我陸軍補助部隊の戰鬪力の增大に比し、敵の補助部隊の數は遙かに我より增加して來た事である。補助部隊も劣勢であり、師團は更に劣勢なりとしたならば、全陸軍は劣勢だ。國防の責任を負擔し得ざる陸軍であるのだ。

二　陸軍の編制裝備

右は師團及兵數の問題だが、我陸軍の編制裝備に至りては英米佛伊獨露の何れに比するも、最劣等にして有形上の戰鬪力最小であると見なければならぬ。固より無形の精神力は軍隊に於て最も必要とする所ではあるが、如何なる勇士と雖も彈に中れば萬事休す、精神力卓越する軍隊を最も進歩せる兵器を以て十分に裝備してこそ戰鬪兵充實すと言へるのだ。二者其一を缺くならばそは不完全の軍隊である、不幸にして我軍隊は其一を缺て居る。

編制裝備の狀態を一々數字を掲げて列國に對照して見たならば最も明瞭であるが、事實軍機に關するを以て記述の自由を有たぬ玆には世間周知の數字を拾ふて大體の比較を求めて見やう。大戰後歩兵火力の主體は小銃に非ずして機關銃と爲つたが、我國歩兵の有する輕機關銃は列國中最小の部位に在り、英米佛伊の二分一乃至三分の一の程度だ、重機關銃に至りては六國の何れに比べても比較にならぬ程少く、九分の一乃至

三十三分の一である。歩兵に對する砲兵の割合に至つても亦列國に比し遙かに少い。而も是等は豫定の充實計畫完成の場合であるが、其の完成の時期も年々歳々軍事費の繰延を受けて延期に延期を重ね、今や未完成の儘第三回の陸軍整理問題に逢着して居る。

我國の師團は十七個麗々と頭を併べてゐるが、實は十一師團半だ。而して其實質は斯の如く貧弱にして列國軍隊の戰鬪力に比し、大に割引をして見なければならぬ。斯の如き狀態の陸軍を更に縮小し經費を搾取しようとするのは果して正氣の沙汰かどうか。軍の主兵とする歩兵を中心として見たる狀況概要斯の如し、其他の兵種に至つても舊來存在のものは歩兵と大同小異だ。更に新兵器軍隊の貧弱さを見よ。

飛行機			氣球飛行船	
日	陸軍	六〇〇	氣球中隊	二
英	空軍	一五〇〇	不明	
米	陸軍	一五〇〇	飛行船中隊	四
佛	陸軍	四〇〇〇	氣球中隊	一八

伊	空軍	一八〇〇	氣球中隊 八
露	陸軍	一一〇〇	飛行船中隊 六
			氣球中隊 一三

米軍飛行機は千九百三十二年迄に千八百機に増加の豫定に爲つてゐる。英伊の空軍は飛行機の幾何を陸戰方面に使用する見込か不明なる故暫く言はぬが、常備兵數より打算すれば我國の飛行機は米軍の率に依れば、約千乃至千百、佛軍の率を取れば、約千四百を要することになる。又露軍の率は少ないが總數は多い、將來若し日露戰爭ありとすれば其主力數を擧げて日本に向ふことになるべく、約倍數の飛行機を以て我を苦しめるだらう、之に依つて之を見れば、飛行機も亦列國の後塵を拜してゐて、野戰軍用としてもまだ不十分だ。而も其馬力數及製造能力も悲むべき狀態に在る。而して我國が戰時敵の空襲に暴露してゐる事は前述の通りだ、東京、大阪、神戸等の大都市並に北九州の工業地帶でも燒燒破壞さるゝに至つたならば、我國は非常の窮境に陷り、場合に依れば、戰爭の繼續は不可能となるかも知れない。倫敦條約の結果斯の危險は更に大に增大して來たから航空部隊の增加は頗る緊急の必要を認めるのである。

殊に大都市の恐るべきは毒瓦斯の放下である。空襲の防禦は飛行機を以て敵機に當ると共に高射砲を併用するを要する。之がためには飛行機を增加し、又高射砲の都市要地に配布する必要數を準備せねばならぬ。其數は配備を要する場所多き故莫大の數に上るのである、然るに高射砲も亦不十分と言ふよりは寧ろ標本的に少數を有するに過ぎない現狀だ。斯の防空の施設を怠るときは國民は關東大震災以上の慘事を到る處に見ねばなるまい。

高射砲		戰車	
日	四〇	四〇	
英	四八	二二〇	裝甲自働車 二〇〇
米	三〇九	一〇〇〇	
佛	二〇〇	一五〇〇	
伊	一四四	四八	牽引車 五〇
露	四四	一八〇	裝甲自働車 六〇
			裝甲自働車 三七〇

戰爭も亦前表の通り僅に標本的存在を認ひるに過ぎない。露軍が有する程度位は之を保有するに非ざれば、平時戰術的及技術的に訓練し、戰爭の用に供するには不十分である。

化學戰に關しては、我國は編制裝備防護法等に就き小規模の研究機關と施設とを有するに過ぎぬのであるが、英國は化學戰部及化學戰學校を有し、化學戰部は委員會と二箇所の研究所を有す。米國は大規模の化學戰部を有し、之に化學戰學校及十二中隊より成る瓦斯聯隊を附屬す。露國も亦大規模の化學戰部を設け、之に六箇の化學兵器研究所、四箇の化學兵器製造所、二箇の化學戰學校、四個の化學大隊を屬し、各軍隊の中隊以上には化學隊を附し、歩兵聯隊には瓦斯室を有す。其他佛伊に於ても列强に準じ、研究、製造、教育の機關を完備してゐる。我國の如く小規模の施設に甘んずるものは他に其類例がない。將來戰に於て毒瓦斯が戰場に於て航空機戰車等と相俟つて偉大なる効力を發揮すべきは豫測するに難からず、大戰後毒瓦斯禁止問題は各種の機會に於て云爲されたるも、今日列强の毒瓦斯研究の跡を見るときは右禁止問題の如き

は一場の夢に過ぎずして、必ず大規模に使用せらるべきは寸毫の疑もない所だ。從つて毒瓦斯に關する我國の施設は決して現狀を以て滿足すべきでない。

三　陸軍の充實難

前記の如く我陸軍は列强の陸軍に比し、落伍者であることは否む能はざる事實にして、之を充實して能く其使命を達成し得る所の陸軍たらしひるは刻下の急務である。其充實には二大綱領がある、第一は既に第三章の四に於て述べたる如くに戰時數百萬の軍隊を動かすに要する兵器器材其他の軍需品は頗る尨大の額に登り、工業力の微弱にして資源に乏しき我國としては豫め準備するに非れば、假令平時に於て多くの精鋭なる常備軍を擁しても戰時の急に處し得ぬのである。而も兵器器材等は世界大戰を一轉期として急速の進歩發達を來し、舊式のもの多くは役に立たなくなり、我國としては其大部を新調するの止むを得ざる窮地に在る、隨つて戰用諸品特に兵器器材整備の爲め我陸軍は莫大の經費を要するのである。

第二は前記の如く我常備軍隊は列强の落伍者だから、之を列强並に建て直すことが必要である。然らざれば如何に進歩せる戰用兵器器材が準備されたとしても、之を使用する所の兵員の教育訓練を行ふ能はず、平時に於て斯の教育訓練を缺けば戰時軍隊は依然平時軍隊と同樣列强の落伍者たるを免れない。故に一般原則から言へば先つ常備軍隊を十分に充實し、之に伴ふて戰時軍隊に要する兵器器材等を準備するのが順序であると思はれる。然れども實際問題としては作戰計畫上の戰時軍隊及其裝備に要する兵器器材の準備所要數、常備軍隊の充實關係等各種の問題を綜合して其調和を得せしむる必要あるを以て、國軍の軍費使用上の關係は必ずしも常備軍隊の充實を先にし戰用兵器器材等の整備を後廻とする譯にも行かないのである。

世界大戰前後より軍事界の世界的進運に伴ひ我陸軍も亦充實の必要を生じ、之に要する繼續費の協賛を得既に若干の充實を實行せると共に、一方に於ては財政等の關係上二回の軍縮を斷行せることは世人の知る通りである。

論者は所謂國防充實費の殘額を眺めて陸軍縮小大に餘地ありと見るやうであるが、

此の費目は戰用兵器器材等の整備上絶對必要のものとして、之を以て常備軍の縮小問題を解決せんと企圖するのは無理な注文である。而も其繼續終期が自今十一年の長き後に屬する計りでなく、前記二回の軍縮に加ふるに最近更に繰延を重ねてゐる。果して何時に至れば豫定の充實が完成するや殆ど見當は着かない狀態である。然るに既記の通り我常備軍隊を充實して列强並に進めることは焦眉の急務であり、之が出來ないとしても幾分なりとも現在の不完全狀態を改め、列强の水平線に近づかしむることが絶對的必要の問題だが、斯の國防充實費の殘額を之に振向けることは不可能の狀態である。吾人は目下研究されつゝある軍制改革が、眞に我陸軍の現代化を目的とするならば衷心より之を賛し、其の改革の一日も早からんことを熱望するのであるが、若しも軍制の整理は其の口實に止まり、其實軍費の搾取を目的とするものならば上叙の理由に依り反對せねばならぬ。

四　軍事費搾取主義と軍制改革の要領

顧ふにマルクス主義の流を汲む所の徹底的軍縮論者、及常備軍と在郷軍人以外に戰時戰鬪部隊編成の人的資源が民間に在りと考ふる迷盲論者は別として、穩健にして思慮ある軍縮論者中には、現在の師團を更に半減せんと欲するが如き大縮小論者は稀有であらう。何となれば八師團を縮小せば、我常備師團は其實力六師團と成り、日清戰役當時よりも一師團少き四十年以前の國防力薄弱時代に還元するのみならず、八師團の大軍縮に依り得る所は僅かに四千萬圓に過ぎないからである。斯の四千萬圓を他に轉用して何程の國家の經濟產業進展を企圖し得べきや大なる疑問である。又之を減稅民力休養の資たらしめんとするか、之を八千萬國民に平均すれば一人一年五十錢當りであり、更に之を一ヶ月に割り當つれば一名四錢だ。一年の軍費四千萬圓は國民一名煙草三袋の代價に過ぎない。而も之が民力休養を切實に要望する中流以下の爲めには實際に於て甚だ緣が遠い。何となれば貧民の納稅する者は皆無に近しと言ひ得べく又中流以下の納稅は僅少であるからである。然らば斯の減稅なるものはさまで休養の必要を感ぜざる一部階級の爲と言ふことになる、夫れも必要ではあらうが、吾人をし

て言はしむれば、いらぬお節介だと評せねばならぬ。否之が爲め却て思想の惡化を激甚ならしむるものと云はねばならぬ。道理の判かる穩健なる我同胞中には國民平均一年五十錢一ヶ月四錢を惜み、之と國家存亡の問題を懸け替へ、戰場の主體たる師團を日清戰役前の國力貧弱時代に逆轉させようと考へる者は皆無だと斷言する。多くの軍縮論者は四個師團減を見當としてゐる樣だ。之は世間知らずの平和夢想が彼等の頭には一杯だが、猶國防の危險と言ふ事にも一部の未練が殘てゐる結果だと吾人は見るのである。言ふ迄も無く四個師團減では得る所の經費は年二千萬圓國民平均年二十五錢月二錢一日六毛だ、そんな端金が國民の爲め何になるか毒も薄めれば毒にならない。金も分散使用すれば何の役にも立たない、集めて使途宜しきを得れば大なる威力を發揮する二千萬圓も國防の爲めには重大の價値がある、之に依りて國家の隆替存亡を左右し得るのだ。

陸軍には一も冗衙冗隊はない、今日何れも最大限の力を盡して能率を發揮してゐる。然ども國防力の要素としては夫々輕重がある、國防上に貢獻する所の力比較的少きも

のを廢止又は併合し、其力の補充方法を考案することは必ずしも不可能ではない。現軍制整理委員に於ても既に相當の考案を有するであらうが、未だ成案に達せざる途中に於て研究上の基礎條件たる現有軍事費を財政緊縮の名に於て、昭和四年の實行豫算以來幾回かの削減繰延を强行されつゝある有樣を見ては同情に堪へざる所である。之を要するに是迄の肉彈式軍隊を改變して新兵器を以て十分に武裝せる軍隊と爲すため、汎ゆる他方面の力を節約するのである。人を少くするも、より多くの力を加へるのである。之が吾人の主張する軍制改革の要領だ。

五　陸軍の現代化と軍縮の危險性

世間では軍制改革とか軍備整理とか言ふ者もあるが、其論旨を讀めば悉く陸軍から金を捻出しようとする軍備縮小論だ。改革でも整理でも何でもない。戰鬪力を減少し缺陷を增大する所の改惡であり攪亂である。現在の我陸軍は既述の通りの陸軍だ、金を取上げると共に充實すると言ふことは到底出來ない貧弱者だ。夫れをやらうとする

ならば所謂八大十大の神通力でも持合さぬ以上は出來ない相談だ。我陸軍は十目の視る處十指の指す所機關銃、步兵砲、砲兵、飛行隊、高射砲、戰車、自働車、裝甲自働車、通信機關、化學戰、技術科學機關の施設に於て列强の落伍者だ、其增加充實は急務中の急務だ。其充實はせず、唯金を搾取しようとする思想は、我國軍備の恩惠に依り世界の荒風に揉まれず、樂々と世界の一等國だと言ふ境涯に漕ぎ付け得たる室咲思想だ。一度世界の荒風に曝されたならば見る影もなく凋れ返るだらう。軍縮の後悔臍を噬むも及ばなくなる、一度斯の境遇に彼等を置くならば彼等の自覺自醒の効果は顯著なるものだらう。然れども夫れは國家を犧牲とする重大問題だ、國家を斯る危難に陷れることは何人も絕對に欲せざるのだ、吾人は現在以上國家を光榮の位置に置き、彼等始め國民の幸福を增進せしめんとする當然の欲求から彼等の說得に努むるのだ。

四圍の狀勢は我陸軍の縮小を許るさない。吾人は玆に改て多くを語る必要を認めぬ。伊太利が日本より貧弱の國力でありながら戰前より九萬を增加し、三十九萬の充實したる陸軍を擁する所以を思へ、伊太利の佛國其他隣國に對する國際關係が日本の米支

露に對する國際關係に比し、表裏共に一層險惡なりとは認め得られぬではないか。

我陸軍常備軍隊を略ぼ列强並に充實するには、兎に角其增加部隊及經費を左記の如く見ねばならぬ。

增加部隊數	初度費	維持費
歩兵聯隊に機關銃二隊增加	七三五〇萬圓	九三〇萬圓
師團砲兵に一大隊增加	六六三〇	六二〇
偵察飛行聯隊　三隊	三〇〇〇	六〇〇
戰鬪飛行聯隊　四隊	六〇〇〇	一二〇〇
爆擊飛行聯隊　二隊	四〇〇〇	八〇〇
氣球隊　二隊	五〇〇	一五〇
高射砲聯隊　三隊	一四五〇	二四〇
戰車隊　二隊	七二〇	一五〇
計	二九六五〇	四六九〇

尙本表の外歩兵の輕機關銃、歩兵砲、師團砲兵以外の砲兵、自働車隊、通信機關、化學戰準備及技術科學機關の充實增加も特に緊急の事項であるが、繁雜の調査を要するが故に之を省いて置く、本表の初度費に國防充備費を轉用すれば之を支辨するに足るべしと雖も、夫れでは戰時軍隊は裝備不完全にして行動し難きものが澤山出來る。又論者の希望の如く八師團を縮小するも、之に依りて得る所の經費では本表の維持費を辛ふじて支辨し得るに過ぎないのである。而も八師團縮小の如きは國防上の關係に於て到底思も寄らぬ事であるは既に述べた所である。

之に依て之を見れば我陸軍は今や實に非常なる窮境に直面してゐる、列强の落伍者たる體勢を建直さんとするも經費を要求する能はず、大縮小は國防全般の關係之を許さず、唯內部の整理改革に依り若干の經費を生み出し、之を以て不十分ながら幾分列强の水平線に近づくの處置を講ずるの外他に途がないのである。此際に方り唯國家財政上の餘裕を得んが爲め、陸軍に大縮小を加へ若くは其經費を搾取せんとするが如きは、世界の形勢も陸軍の現狀も將又國防の何たるを知らざる盲擧と言はねばならぬの

である。

之を要するに我陸軍は兵數に於ても、戰鬪上の實力に於ても共に國防の要求に對する最小限度に達せざる狀況に在り、亦其戰鬪力は之を列國に比するに有形上甚しき遜色あり、而して兵數に至りては戰時急造し得る某兵種に限り、某程度迄之を減少し得べきも、師團數は最早減少するを得ず、殊に戰鬪力の劣弱を補足することは喫緊の急務なり、斯の目的を達するためには陸軍費搾取の如きは思も寄らず、又强て之を搾取して他の減稅に充當するとしても國家經濟の發達に何等の効果をも呈して來ない。故に眞に至誠國家を憂ひ、國家の將來を思はゞ、陸軍自らをして軍制改革に依り充實の途を盡さしむるを以て最も賢明且有効の途なりと信ず。蓋し此方法は兵數の減少に依り軍縮論者の目的は一部貫徹し、一方國防力を比較的充實せしむるを得て兩者妥協の最良策なるべし、而して國家財政の困難は吾人素より之を知る故に國防力の劣弱を醫する爲め差當り陸軍費の增額を希望せざるなり。國家財政の救濟に至りては國費三十七八億地方費十五億合計五十億以上の巨大なる經費に着目すれば、國家及地方機關

の改革行政の改善に依り數億の緊縮の如きは決して難事ではなからう、國防を危殆に瀕せしめて僅かに二、三千萬圓の經費を捻出せしむるの不可なる古今東西の歷史及現今世界各國の實情が悉く之を證明してゐるのである。之を率直に言ふならば、我國は現狀に大變革を來すに非ざれば經濟力の發展に必要なる要素の殆んど總てを缺いてゐる。年々數千萬圓を經濟力發展のために投ずるとも、夫れは燒石に水で格別の効果あるべき筈がない。國力を組成する二大力の一たる經濟力は既に斯の如し、他の一大力たる武力を縮小し之を見る蔭もなき狀態に陷ゐることゝせば、玆に我國力は水平線下に埋沒することになる、さなきだに外交の拙劣より列國から絕えず蔑視せられてゐる我國は國勢彌々陵夷し亦振はざるに至るだらう、而して東亞の天地に於ける列國勢力の均衡は失はれる、是れ太平洋禍亂の根元だ。

第六章　山本條太郎氏の國防經濟化論を駁す

一　軍部軍隊軍人の任務に關する誤解

今日我國に流行する陸軍縮小搾取論の殆んど總ては空想論であり、感情論であり、低級論である。都下の某新聞は嘗て其社說に於て述べて曰く「國家に經濟力なくして戰爭は出來ない、經濟力は即ち國防力である。斯の經濟力の發展を妨げて陸軍に過大なる國費を消費するは國防力を退化せしむるものである」と、空想、感情、低級も玆まで徹底すれば狂論となる。流行論の論調は概ね斯の通りにして吾人が前各章に述べたる如き一國の軍備を決定するための基礎たるべき要素に就ては何等研究されず、一切が感情的獨斷的に走り、只國家の經濟力に比し軍費が多い、減額せざるべからずと言ふに過ぎず、然ども周密なる研究を盡せば、列强中我國に比し陸軍費の負擔小なる國は少く、却て其負擔大なる國が多いのである。流行論の多くは經濟一天張論であ

り、其經濟論の根據不確實なる一例斯の如し、感情的獨斷的の無根據論も論者一流の口筆の巧妙を以て粉飾され、己れに重く他に薄く近きに親み遠きに疎なる人間の天性と、國防軍事に暗き現代日本人の通弊と、折柄の不景氣に依りて勢を逞ふしてゐるが元と是れ何等確實なる基礎の上に立たざる砂上の樓閣的亡國論だ。自然的にも自ら崩潰すべき素質の議論だ。我國民にして少しく思慮を費すならば、流行論に首肯する者は皆無だらう。從つて吾人は此等十把一からげの流行論に對し、一々辨駁を加ふる迄もない。政友會政務調査會長山本条太郎氏の大著「國防經濟化論」に至りても、亦一般流行論の範圍を脫せず、之に對する大體的の反駁は以上各章で十分だと思ふも、氏が知名の政治家であり、且氏自身は其の國防經濟化論は政友會の政策と沒交渉なりと謂ふも、吾人は然らずと觀るべき根據を認むるが故に、敬意を表して一章を設くることにした。

氏の立論の基礎骨子には一の重大なる誤謬がある。其の誤謬とは主客本末輕重を轉倒してゐる事だ、氏は國防施設は軍部限りの持物でない。軍人限りの任務でない。戰

爭は軍部限りの事業でない、軍人限りの活動舞臺ではないと稱し、軍部軍隊軍人の任務には曖昧朦朧たる觀察を與へてゐる。然ども國家組織と戰爭の實際とを熟視するならば、誰でも國防施設の主任者は軍部にして、敵と戰爭するの任務は獨り軍人にのみ課せらるゝことを首肯するであらう。國防施設及戰爭に於て軍部軍人以外の者の爲すべき仕事は、軍部軍人をして其の任務を有効に遂行せしむる爲め、總てが戰爭の目的に統制せられ其の立場々々に據りて戰時生活の特別業務に服することである。所謂國家總動員とは之を言ふのであつて、軍部軍人の任務には之が爲め毫も變更はないのである。少しく餘談に亘るも國防は軍人のみの任務でなく、全國民の負擔すべきものなりといふ語は、日清戰役に於て國民の熱烈なる後援に感激せる軍人が、凱旋後國民に對する謝辭をしたるに始まり、日露戰役に依り更に盛に高潮せられたるもので、決して世界大戰の產物ではない。然るに軍人ならざる國民が軍人に對し、戰爭は軍人限の任務でない吾々も軍人同樣戰爭の任務を有するものであると大言壯語する者あらば、事實戰時業務の一部分を負擔し居るとは云へ、大なる困苦缺乏に堪へ一身を犧牲とし

て奮鬪する軍人には一種の侮辱に聽へる。殊に戰時に於て斯の如き不用意の言は軍隊の志氣を沮喪し、戰鬪の勝敗に大關係を生ずる。蓋し戰場に於ける軍人の志氣は汎ゆる方法を盡して鼓舞激勵するも、困苦缺乏と危險悲慘の光景とは常に之を壓迫衰耗せしめつゝあり、國民にして氏の如き言を弄する者あらば、孰が進んで一身を國家に捧ぐるを快とする者あらんや。斯かる消息を解せざる者は已に國防を語るの資格なき者だ。夫れはさて置き戰爭に於て本體となり、主なる役目を負擔するものは軍部軍隊である。氏の文章は頗る婉曲にして拔路を作つてゐるけれども、戰爭遂行上に於ける軍部軍隊輕視思想の歷然たるものあり、後に至れば益々夫れが的確になつて來るのを悲まざるを得ない、是れ主客本末顚倒の第一だ。

二　獨逸敗戰の原因に對する誤觀察

氏は戰爭遂行上に國家經濟力の重要なる所以を說き、獨逸は經濟のため破れたのだといふてゐる。成程戰爭末期の狀況は當さに其通りだが、是れ其一のみを知つて他の

多を知らぬ議論だ。獨逸を失敗せしめたのは主として政治の暗愚と外交家の無能である。政治家の暗愚は大戰勃發の危機を知らずして戰爭直前に軍備を怠り、大戰當初に於て兵力不足を來し爲めにマルヌに敗れ、速戰速決の目的を達し得ざらしめた。是れ既に第二章に述べたる所にして其外政治家暗愚の事實を擧ぐれば數限りもない、外交家の無能は味方と爲るべき公算ありし、ルーマニヤ及三國同盟中の伊太利を敵側に廻して軍部に絶大なる敵を與へた、獨逸軍は苦戰の結果速かに戰爭の目的を達する能はず、萬策盡き自暴自棄に陷り、無制限の潛水艦戰を爲すの止む無きに至り、遂に米國迄も敵に廻した。是れ獨逸失敗の主因にして、經濟的の苦難は此等が齎した自然的歸結に過ぎない。大戰末期の狀態は、假令獨逸にして經濟的に猶ほ餘裕あり國民生活困難なしとしても、斯の如き大敵に對しては最早支ふべからざる決定的の問題であつたのである。而して羅伊米三國を敵に廻したる責は、獨逸政治家も亦其一半を負はねばならぬ。何となれば羅伊二國が敵に走りたるは戰爭が獨逸に有利に進展せざりし結果にして、其戰爭の成績が思ふ樣にならざりしは政府か軍部の意向を拒否し、戰前に軍

備を怠りし結果であり、米國が參戰せしは獨軍が窮餘止むなく潛水艦戰を無制限に實行した故に外ならず、氏たる者宜しく活眼を開き軍備の輕視が何處迄其影響を及ぼすかを看取しなければならない。

國家の經濟力が國防上に大なる力を與へ、戰爭遂行の最重要なる要素たるは言ふ迄もない事であり、殊に國民生活維持のため缺くべからざるものであるから、之に力を盡すべきは勿論だが、百年苦辛の餘築き上げられたる國家の經濟力も戰爭に敗けるか、或は勝つも長期の戰爭に從事するの止むなきに至れば、一朝にして蕩盡され、爾後長く國民は生活の苦難に陷るのである。之を以て經濟力を高むることに偏重する結果、軍備を輕視して之を不完全ならしむるは暗愚蒙昧の極である。戰前に於ける獨逸の經濟力は旭日昇天の勢を以て偉大なる發展を遂げ、當時經濟力に於て世界の首位を占めたる英國の壘を摩せんとするの勢を示し、英國は愚圖ついて居れば將さに獨逸の己を凌駕するに至らんことを深く怖れた。この經濟競爭が大戰の主なる動因であつた事は世界の識者が齊しく知れる處である。氏は開戰前に於ける獨逸の經

濟力が如何なる程度に達してゐたなれば戰爭に勝てたと言ふか、假令獨逸の經濟力が當時の二倍あつたとしても、兵力の關係があの通りであつたならば、あの大敵を控へてはドウすることも出來ず、戰爭を今一年續け得る位が關の山だらう。マルヌ會戰以後西方戰場の戰勢が殆んど一地に膠着し大體に於て動かなかつたのは、獨逸兵力不足の結果にして經濟力の關係ではなかつた。即ち獨逸から言へば兵力の不足か長期戰を惹起し、長期戰が經濟上の困苦缺乏を來し、經濟上の困苦缺乏が國家を內部から崩潰せしめたのであり、英國側から見るなれば平生の陸軍輕視の結果、精銳なる大軍を開戰と同時に一擧して戰場に出すことが出來ず、佛軍健在の御蔭で長時日を費やし辛ふじて大軍を出したが、獨活の大木で徒ら兵數のみ多きも獨軍を壓倒する能はずして長期戰に入り、幸に戰爭には勝つたが國力を蕩盡して世界最富國の御株を米國に讓らねばならぬ破目に陷り、今でも苦み拔いて居るのである。更に英國の勝てたのは佛軍の御蔭である。經濟力に於て當時世界に冠たりし英國でも、佛國を拔きにしては大陸で獨逸を押へ付けることは出來なかつたのである。之を以て見れば經濟偏重軍備輕視論の

如何に亡國的議論であるかは明瞭だ、是れ山本氏の主客本末轉倒の第二だ。

三　平時極小戰時極大の空想論

大體に於て如何に卓越の富力を有する國家でも、常備軍の皆無だといふことは國防力の皆無といふ事と同一だ、常備軍を極度に縮小し僅少の常備軍を有する國は國防力皆無に近きものだ、强大なる常備軍を有する國と交戰すれば忽ち敗北するのは請合だ。斯の種の國防を企つる者ありとせば、そは所謂泥繩式にして到底間に合ふものでない。國家の經濟力は國民に一種の覺悟さへあれば自然に放任するも隆々として發展する。支那を見よ、民國元年以來內亂を續くる上に國民は軍閥の絕えざる誅求に遭ひ、塗炭の苦を受けてゐるが、平然として之に耐へ、政府も立ち行き國家全體としても相當の經濟力がある。露西亞は大戰以來經濟力窮乏のドン底に陷つてゐるが、相當の常備軍をもつてゐたからこそ、昨年夏支那の敢行せる東支鐵道の奪取事件に對し、遂に兵力に訴へて鐵道保持の目的を達した。若し露西亞にして强大なる軍備なかりせば、支那

の横暴行爲に對し泣き寢入する外は無かつたのである。今日の支那、露西亞の經濟狀態に於ても戰爭は出來ることを現に證明して居る。之に反し兵力皆無か若くは極小では絶對に戰爭は出來ぬのである、經濟力と軍備の關係は實に斯の如きものだ。

軍隊の平時極小戰時極大論は理想論としては實に結構だが、實行の出來ぬ空想論である。常備軍極小にして戰時極大軍を出動せしむるは、絶大の困難事業にして長時日を要し、而も戰鬪力微弱なるの不利あり、此不利は兵員の夥多に依りて補はざるべからず、故に經濟力偉大なる國家の外採用し難き國防法にして、殊に他に强大なる友軍ありて之を掩護するに非ざれば、絶對不可能なるは大戰に處したる英米の實際が證明してゐる。斯の如き國防法は必ずや長期戰となり、幸にして戰勝つも國家が經濟上の容易に拔くべからざる苦境に陷る所の不經濟國防であることは、是亦英國が實例を示してゐる。然るに國防經濟化論を提げて斯の不經濟國防を主張するは實に奇怪至極だ。山本氏が國防には世界的の標準もなければ、標準の立てやうもあり能はぬといふは實に至言にして、日本は日本、英米は英米で各々四圍の關係と國家の實情に應じ、國防

計畫を要するのだ。

然るに氏は自家撞着的に米國に倣ひ我國防を律せんとする、吾人をして言はしむれば米國は侵略意思の存せざる限り、陸海軍共に贅澤過大の長物である。之に反し我國は大陸接壤國である。强大なる常備軍を有する國と接近し、且つ生活線を大陸に有するが故に、平時極小戰時極大主義を取り戰時英米失敗の跡を逐ひ、陸軍の編成に長時日を要するならば、其間に我朝鮮迄も敵手に落ち、直に屈從するの止む無きに至るべし。我國の狀況で平時極小戰時極大主義を實行せんには、大陸に同盟國ありて我生活線及朝鮮を確保掩護することが絶對必要だ。山本氏は連りに國家總動員を主張する、國家總動員は將來戰に是非共必要だが、之を實行する爲めには平時極小の軍隊では目的を達することが出來ない。國家總動員を實行する爲には矢張り大陸に嚴然たる地位を確保し、之が掩護に任ずる味方の强大なる軍隊があらねばならぬ。米國の如き最有利の地位に在る國ですら、總動員には掩護を要するのである。一九二二年七月二十三日發表せられたる米國々防方針に

米國は開戰當初に於て平常々設の正規軍を動員して九個師團とし、之に護國軍十八師團並に編制豫備軍の一部を加へ、先づ之を以て國境、海岸を守備し、其掩護の下に國内に於て大動員を行ひ、此の間各軍の軍事訓練を補足完成し云々

とあり、氏の言ふ所の平時極小とは何師團を意味するや不明なるも、直に動員し得べき常備師團丈は開戰と同時に大陸に送り得る。然し乍ら斯の少數の師團にて戰時大陸軍の編成及國家總動員の掩護の出來ないのは火を睹るよりも明かだ。氏は唯軍部に衣食する一部の人々が舊套に囚はれ、因襲的心理に引きづられ平時の縮小を忌避すと、變な邪推をしてゐるが、苟くも國防の責を負ふ所の現役軍人に左樣の人はあるまい、勿論吾人は今や軍部に在役衣食せぬ者である、我々は至當なる研究の結果國家を憂へて氏の妄論を醒さんとするのである。要するに經濟偏重軍備輕視觀念を以て、國防を基礎づけんとする思想は、全く稀有の空想にして一も實際に卽してゐる處なく、其結果國防を危殆に陷れ、國家を救ふべからざる窮地に投ずるものであることは、世界大戰の事實丈けでも昭々乎として明かなる幾多の例證を殘してゐる。是れ氏の主客本末

顚倒の第三だ。

以上三點は山本氏の主張する國防經濟化論の根本基礎であつて、悉く錯覺か研究の粗漏かに外ならない。之より順序を追ふて主要と信ずる所の氏の論點に觸れて行く、氏は陸海軍兩者の合併說を主張してゐる、抑々人類の進化は分業制度を要求する。事業の複雜多岐に亘るに於ては益々分業が必要だ、氏の所論は第一に人類文化の進展に關する原則に背反する。而して實際問題として兩者主管事項は其性質を異にするもの多きのみならず、廣汎多岐にして之を合一するときは却つて能率を害し、經費上に於ても極めて僅少の節約を爲し得るに過ぎない。此等の關係あるが故に各國共に陸海軍を獨立せしむるのみならず、空軍省すら各國分立の趨勢に在り、現に英佛伊三國は之を分立した。獨逸露西亞の如き極めて微弱なる海軍を有する國に於ては、陸海軍省を合併してゐるけれども此等は例とするに足らない。

四　在營年限短縮論の誤謬

次は在營年限短縮論である。既に論ぜし如く我國の國防方針は何處迄も速戰速決主義であらねばならぬ。速戰速決のためには精兵主義ならざるべからず、始より長期戰を目的とし常備兵力を極小ならしむるが如きは却つて國防の不經濟化である。而して精兵主義は在營年限の短縮とは相容れない、輓近科學の進歩、兵器の發達戰鬪法の複雜化は却て在營年限の延長を要求する、在營年限短縮の爲め必要の施設を行へば、某程度迄之を短縮するを得るだらうが、實力に於てはドウしても在營長きものに劣るのである。

歩兵は戰鬪兵種中最も單純なる兵種なることは世間周知の事だ。而して若し歩兵を以て單に小銃射擊を行ひ、銃劍を揮ふて突擊する丈けの兵種だと考ふるものあらば、夫れは過去の話である。今日では輕重二種の機關銃、平射曲射の歩兵砲、手榴彈、擲彈筒を以て裝備され、手旗、有線電話、無線電信、回光通信、軍用鳩の使用、飛行機戰車に對する協同及戰鬪、毒瓦斯の防護、煙の使用等の任務に服さゞるべからざるに至り、且つ戰法の革新に伴ひて、各兵卒に獨斷と、戰鬪能力の增進を要求すること到

底昔日の比ではない。歩兵既に然り、其他の兵種殊に技術的兵種に於ては更に複雜してゐる。故に在營年限の短縮は國防力の減退を意味する。軍人の戰鬪動作は時間の餘裕なくして、他の協力指示を待つを得ざるを常とし、劍電彈雨の下に於て瞬間に判斷し直に實行し得ねばならぬ。故に戰鬪動作は一通り了解した程度では駄目であつて、熟練か極めて必要なのである。

一般國民教育の向上、青年訓練の効果は軍隊教育に若干有利の影響を及ぼすべきや論なしと雖も、決して顯著なるものでない。假令青年訓練を改善しても、青年訓練の一時間は軍隊教育の一時間に匹敵するものではない。殊に其の訓練が戰鬪的教育の範圍にまで手を伸ばすことの殆んど不可能なるを思へば明かなことだ。故に在營年限を妄だりに短縮することは大に考へものだ。

在營年限短縮を强ひて實行せんとせば、極力國防力の減退を少からしむるために、左記の施設を條件とす、然れども之が爲め莫大の經費を要することを覺悟せねばならぬ。

一、下級幹部の增加と其資質の向上、演習場射擊場、教育資材の整備增加等に依り教育力を充實す。

二、兵卒各種の勤務雜役を輕減し、教育時間を捻出する爲め傭人を增加す。

三、守備警備、應急出兵等に支障なからしむる爲め、植民地支那滿洲に在る軍隊は長期在營兵若は長期志願兵にて充實し、內地軍隊にも若干の長期在營兵又は長期志願兵を要す。

四、以上の外特科兵には左の施設を要す。

乘馬兵種の兵卒定員減少期間に於て、馬の管理及新調教のため調教手を增加す。

鐵道電信航空隊に於ては、一部特種の技術兵の爲め志願兵制を設け、其特別の教育機關を整備し、鐵道隊の演習線路を擴張す。

五、在營一年制の爲めには猶ほ入營初期教育期間、該教育に任じ、且つ諸勤務に從事する基幹兵として、所要の長期志願兵を要す。

以上施設のためには佛國に於て見るが如き莫大の經費を要し、然も在營年限短縮に依

る有形無形の實力の缺陷を補ひ得るや疑問である。

佛國では在營年限を一年半より一年に短縮する條件として、經常費約六億法（陸軍費總額の約一割）を增加し、長期志願兵を十萬六千に軍吏を一萬五千に、傭人を三萬に憲兵を一萬五千に增加する外、三十一個の野營地を整備し、植民地の事變に應ずべき控置部隊として約六師團を本國に編成し、一年在營兵は純軍事教育に專念し得るに至りて始めて之を實施したといふてゐる。在營年限を一年に短縮せるは獨り白國あるのみ、露國は二年、米國は三年である。伊國は一年在營制を一旦可決したが、軍の實力低下の理由に依り、其實施に入るに先ち再び一年半に復歸したのである。

五　百姓一揆式軍備論

山本氏の全文を通讀する時は、軍隊教育の成果なるものを殆んど無價値の如く輕視し、戰時に於て普通人を召集して、直に戰鬪力の充實せる軍隊を編成し得るかの如く誤解してゐる。斯の如き粗笨の頭腦を以て、國家存亡に關する大事を取扱はんとする

は驚き入つた次第だ。氏は

平時に於ける常備的施設を極度に縮小すると同時に、非常時に於ては直に國家の急に應じ得る準備的計畫を用意して置く。

今後の軍備は當然に科學化、機械化さるべきであるが、其所要人員及所要機關は事情の容認する限り、之を民間に於て培養統制し、平時に於ける軍部の機構を縮小する。

一朝有事の秋には、國民も工場も軍馬も其他國民が有する一切の機關を擧げて軍國の急務に應じ得る樣にする。

平時は極小戰時は極大化

何故に國防當局は其新なる主戰部隊と、之に必要な機關とを廣く民間工場其他適當なる諸方面との連絡に求めないか、平時は技術員として民間に勤務し、其經驗を豐富にする、そして國家非常時の場合には直に動員せられて機械戰の尖端に躍進するそれで善いのであり宜い筈であらねばならない。

極めて少數の特殊部隊技手的要員のみを平時に常置することゝし、他は總て民間に解放し養成する。

等各所に於て述べてゐるが、其の論ずる所抽象的に過ぎ漠然として不明瞭であるが、軍隊教育を無價値視すると共に、陸軍工場を民間經營に移さんとするに外ならず、工場の民間經營に關しては後に述べることゝし、先づ軍隊教育無價値論から片付けて行く。山本氏の思想は國家總動員の履違から出發する、國家總動員は殆んど戰鬪力なき不完全極まる多兵を戰場に使用するためのものではない。軍隊の戰鬪力活動力を十分ならしむるため、國力民力の一切を統制し、最大の力を發揮するの謂である。軍事教育無き國民を驅て戰場に出して夫れが何になるか、農民を集めて歩兵を作つたとしても、夫れは百姓一揆に過ぎない。馬丁及乘馬の心得あるものを以て騎兵を編成しても敵情捜索も戰鬪も出來ない、或は此等を以て砲兵を編成しても、駢馬を御して不整地を通過することも射擊も出來ない。民間飛行家及職工を集めて飛行隊を編成するが如きは、最も有利なるが如く見ゆるも、夫れすら一向に役に立たない飛行隊だ。飛行隊

は世人の知るが如く偵察、戰鬪、爆擊の三種に區分せらるゝも、其の主たる任務を示すに過ぎずして、何れも爾他の任務に堪へざるべからず。而して偵察の爲めには戰略戰術に深く通曉し、適當に情況を判斷し、且つ戰場の諸徵候を見別する特種の眼識を有せざるべからず、戰鬪のためには空中に於て鳥の如く各種の運動をなしつゝ、機關銃を有利に使用せざるべからず、爆擊のためには十分なる熟練を要す、然るに民間飛行家は常に最平易の飛行のみを爲してゐる者だ、只最初より飛行敎育を要せずと言ふのみ、長期の敎育を行はざれば軍隊の任務に堪へない、飛行隊工卒に相當する技術の職工も技術ある丈けでは甚だ不十分にして、飛行隊兵卒として更に各種の敎育を行はざるべからず。之を一般的に言へば、兵卒は指揮官の命令號令に依り、又は獨斷を以て各兵協同し敵情地形及我軍の情況に適應する戰鬪行動をなし得ざるべからず、此事は兵器の使用と併せて熟練を要す、熟練には長き時日を要す。而して山本氏の議論中兵器の製作者は亦戰場に於ても、亦其兵器を使用し得るものと斷定せるかの如く見ゆる節なきに非ざるも、分業の今日製作者は其の使用法を解せざるを通常とす。況んや戰

場に於ける使用法に於てをや。氏は陸軍の技術兵を、戰時民間の工場より取れと謂ふも、在鄕軍人にして工業動員のため陸軍に召集する能はざるもの數割に達す。斯かる狀況で、戰時民間工場から陸軍の要員を得ようとするは過望だらう。要するに氏の議論を批評するには、空想若くは机上の空論なる一語で足る。斯の批評に不服ならば、宜しく比較的敎育の單純なる步兵隊小銃手の敎育に就て一日の見學をなし、素人を最低度の小銃手たるに敎育するに要する敎育事項時日及困難の程度を調査し、且つ既敎育兵卒が、銃劍を揮ふ素人何人を同時に相手にして勝ち得るかを實驗せられよ。最後に尙ほ再度の批評を加へて置く、氏の議論は大學豫科を卒業すれば本科の課程を履まずして法科の者は裁判官や、辯護士の職務に堪へ、醫科の者は醫師を免許して可なり、大學の本科は極小の設備で宜しいと言ふのと同一だ、斯る無法の議論があるものではない。

山本氏は國家總動員のため陸軍兵員を減少し、之を戰時工場より得るため、又は民間工業の發達等のため、陸軍工場を民營に移せと主張する。其主張に對する誤解は既

に述べた所で概ね明瞭だと思ふも、更に附加へる。第一に多額の配當をなし多額の給料を仕拂ふ營利事業とするならば、陸軍は現在より高價なるか、若しくは粗惡の兵器其他の軍需品を購買しなければならぬ。之は却つて不經濟化だ、同質同價の品物を供給するならば民業では引合はぬだらう。殊に一般生活の必需品と何等の關係なき特種の兵器に於てをやである。

六　無勘定なる青年訓練論

山本氏は青年訓練の成果を米國護國軍以上に向上せしめ、之を戰時直に軍隊の要員に充用することにし、以て常備軍を半數に減少しようと企圖してゐる。青年訓練の成果を軍隊教育と同一に期待することは絶對に出來ない相談だ。軍の戰鬪力劣等では我國防及作戰の目的の貫徹は不可能なるのみならず、我國の經濟力及工業能力は劣等兵の多數を以てする戰爭を許さない。從つて我國は絶對に精兵主義でなければならぬ。國情を全然異にする米國の護國軍抔を眞似て國防を危殆にさせることは、全く鵜の眞

似をする烏の愚を學ぶものである。氏は連りに米國式を謳歌賛美するが、大戰に於ける米國軍が、戰鬪力劣弱なる百姓一揆式烏合の勢であつたことは、聯合軍間に定評がある。佛軍は之を自己の中間に挾み、大隊以上の各本部、司令部には一名宛の指導將校を附して之を支持したのである。氏は戰時我軍の支持者を何れの國に求めんとするのか。一歩を讓るも米國の護國軍を眞似ることは經濟上之を許さぬ、米國護國軍は總員十八萬人にして服役三年、毎年百四十四時間以上召集教育し、別に野營十五日間の教育を行ふに過ぎざるも、之がため一年一億萬圓を支出してゐる。我國壯丁の甲乙兩種合格者は毎年三十八萬人内外である。師團を半減すると假定して入營人員の差引を行へば、甲乙種青年訓練所要人員は約三十二萬と爲る。之を米國の例に依りて計算すれば、約一億八千萬の巨費を要し、八師團を減少して得る所の經費では、其の全部を使用するとしても僅かに七萬二千人を教育し得るに過ぎない。然も幹部を常置する經費の控除を要するが故に、被教育者人員は更に大に減少する。而して斯の如き程度の教育では矢張米國の如く三年服役の外あるまい。故に戰時召集し得る人員は約二十一

萬六千人に過ぎない。八師團に入營する毎年の人員を四萬人とすれば、現役、豫備、後備、第一國民兵役を通じ二十箇年服役であるから、立派に教育されたる在營在鄕軍人約八十二萬人と爲り、此人員は毎年常に召集使用し得る數である。故に氏の案は經費の點でも、人員を得る點でも、戰鬪力の上に於ても、不利不經濟極まる愚劣案である。山本氏の意見の如く、甲乙兩種に合格して入營せざる者を、悉皆教育するが如きは經費上思も寄らない。實に氏の意見は質の良否を見別する能はず、人員及經費の計算も爲さざる無勘定論である。

山本氏は工場從業員一人當りの生產額年約千圓、農家一戸當の生產額六百五十圓を基礎として、壯丁一人の年生產額を千圓と計算し、壯丁十萬人を減ずれば一億圓の生產增加であると大々的に陸軍縮小の必要を强調してゐるが、我國の如く農業者の多き國に於て壯丁一人の生產額は平均三四百圓にもならぬであらう。前記は農家一戸の生產額にして一人の生產額ではない、一家數人合計の生產額である。我國の現在の狀況に於て將又失業者の多き今日に於て一名の生產額千圓とは如何にも大袈裟である。是

れ氏が只陸軍々縮に急にして公平に諸事を調査することなく、我田引水的に論斷せる一例として特記するに足ることだ。其他の誤謬を一々指摘するの煩に堪へないから、最後に默止し難きもの二三を揭げて結論に移ることにする。

七　外交の神聖視と全國軍人に對する侮辱

氏は連りに我外交の無能を攻擊して居り乍ら、國防を論ずるに當りては忽然として其主張を翻し、斯の無能外交に信賴し、否斯の無能外交を神聖視し、外交が平和主義ならば戰爭は起り得ない。故に軍備は平和主義の外交に從屬し、極小とせねばならぬと言ふ。何ぞ夫れ自家撞着の甚しき、實に正氣の沙汰とは思はれない。而して又萬一の場合など考へたならば、人生安立の地は遂に發見し得られないと國家の大事を扱ふこと塵埃の輕きに似てゐる。氏に問はん、氏は夜間の戸締を等閑に附し、萬一盜賊の入ること抔考へては安立の地は發見し得ずと晏如たるを得るか。而も我國は現に戰爭の危險から脅威されてゐる。否我國のみならず、世界何れの國が戰爭なしと樂觀し國

防を怠てゐるか、更に氏は我貿易額並に軍備を縮小せよと言ふが、貿易の不振は政治外交無能の產物である、我國の貿易が今日の程度に發達したことは日清日露二大戰役の御蔭に依るを主なる原因と見なければならぬ。斯の二大戰役に勝たざるか、又は戰はずして島國に雌伏して居たならば今日の如き貿易額に達せざることは明瞭だ。而して政治外交が無能なれば夫れ丈け一國の危險は增大するから、軍備は益々力を增大せねばならぬのである。又氏は國防は軍部限りの持物でない軍人限りの任務でないとか、國防の一部面たる陸海軍のみに巨費を投じ之がため國民の負擔を重からしむるとか、或は軍部を以て忠君愛國の獨壇場でもあるかの如き特種觀念とか、或は平時兵員減少のため、將校の進級の途を狹くする懸念とか、軍隊軍人に向ひ多くの輕視的惡聲を放つてゐるが、我國の國防は國體に立脚してゐる軍人は陛下の股肱であり　陛下の命是れ守る忠良の國民である。帝國議會が國民の政治意識を代表すと言ふならば、帝國の軍隊も亦國民の國防意識を代表するものだ。國民を代表して國防の任務に服しつゝあるものだ。而も帝國議會の如き少數の人員ではない。是こそ眞に國民の國防意識

を代表してゐるものだ、我軍隊の精神的に世界に誇り得る所以は實に玆に存するのである。而して誰が何といふても軍部が國防の實行責任者即ち國防の主任者であることは炳乎として國意の明示する所にして、軍隊が國防の主體であるは常識の所有者に異存ある者なく、屢次の詔勅及兵役法の精神が示す所である。山本氏の議論の如く百姓一揆式の多數軍隊を戰時に使用するものとしても、常備軍隊及常備軍隊に依つて敎育せられたる在鄕軍人は帝國々防軍の骨幹である。然るに氏の言は此の重任を擔ふ者も常人と同等以下であり、寧ろ帝國々民に緣遠き人種の如く國民に向て宣傳するのである。數百萬の在鄕軍人か勅語に基づき既に在營の義務を終りたるに拘らず自ら進んで在鄕軍人會を組織し時と金とを費して軍人精神の鍛練軍事能力の增進に努めつゝあるは何のためか氏の言に從へば、是等在鄕軍人も國防上の任務は他の一般國民と少くも同一だと謂ふ事になる。同一ならば在鄕軍人會の組織や在鄕軍人の努力は無用にして餘計の御節介だと言ふ事になる。實に氏の言は軍部軍隊軍人全部に對する侮辱だ。

第七章　結　論

一　軍縮論の無責任

現代に於ける我政界及言論界の流行事は責任を輕視することである。盛に責任論を絶叫するが、其責任の解除は辭職することである。辭職すれば一切の責任が帳消になるとなし、其事柄が國家社會に大害を及ぼすとも、重大なる過失に屬するとも、正義の許さゞる處であらうとも、洒々然として平氣で澄ましてゐようといふ世の中だ、責任とは左樣のものではあるまい。間違へば腹を切る覺悟を以て事に當らなければならぬ。明治維新の大業は斯の眞劍味から成就したものであつて、將に我國傳統的精神の發露である。斯決心覺悟が旺盛ならざる限り國家の進運は望まれない。殊に政黨の責任感の如き論難すれば數限りはない。此間に於ける言論界の亂調亦言語に絶するものがある。近頃流行の陸軍大縮小論は此等政界言論界の產物だ、國民は須らく注意せ

よ。而して熟視せよ、縮小論の論旨は只財政困難なり軍費の負擔重し戰爭はない軍費は過大なりと獨斷せるに過ぎざるを、而して其獨斷の根據は悉く皮相的想像に過ぎざる穴だらけの信用す可からざるものであることを。一言にして今日の軍縮論を評すれば悉く是れ群盲象を摩するの圖だ。一として眞相に觸れてゐないのである。財政難は獨我國のみではない、財政難救濟は他に途あり、國家の存亡を依托する軍備を第一の對象物とするのは亂暴至極だ。戰爭はないと言ふが我國四圍の形勢はしかく晏如たるを許るさぬ。最近の倫敦會議の裏面殊に米國上院の批准會議の如きは露骨に之を物語つて居る。國民の負擔重しといふも、英米二國を除く他の世界各國は概して日本よりも負擔が重い、抑々國民の負擔の重さと國防の危險とは秤に掛け得る問題ではない國家の存亡に關する限りは國民は苦しくとも其國情に應ずる軍備を整へねばならぬ。此決心あつて初て國力も培養される日清日露戰役の勝利は國民に斯の決心があつたのに原因する。吾人は斷じて此事を忘れてはならぬ。之を忘れ只經濟力がどうの負擔がドウのと言ふのは聰明なる國民の語ではない、目ざす所は國家の將來であり國家百年

の大計である。前途の經綸に國民の奮起を求めすして徒に現在に引據ゐんとする政治は國家の生命を短縮するものである。我軍が滿洲朝鮮を棄てる決心があり、國民が一小島國として三四流國の地位に甘んじ、白人の脚下に跪いて國民生活が保持さるゝならば陸軍の縮小も可なりであらうが、滿蒙が我國民生活に國大の關係ありとすれば、是非とも之に處する丈の兵備を以て最少限度としなければならない。之がためには臥薪嘗膽の覺悟が要るのである。獨逸國民の軍費負擔は必ずしも我國より輕いとは言へない。彼等は軍費外に毎年數十億の尨大なる賠償金を負擔してゐる。然も隆々たる復興の盛觀を呈してゐる所以のものは一に國民精神の緊張にある。我國民が雄大剛健の氣分を缺きて消極退嬰主義に墮し、斯の四圍の狀況に處し乍ら軍費の負擔がどうのかうのと泣言小言を並べる樣では、假令軍備に大縮小を加へても遂に之を全廢せざれば滿足せざることになる。夫れは論より證據既に二回の大縮小をなして今度は三回目の議論である。國民の意氣を轉換しなければ、第四回第五回と軍縮論の續出するは請合だ。之に反し我國民が獨逸國民の如き決心を以てせば、現在の經濟難も切拔け得る計

りでなく、更に大發展を遂げ得るだらう。我等は既に日清日露戰役前後に於て適確なる經驗を有して居るではないか、其の切拔發展は勿論容易でなく、一時停頓の狀態に在る期間もあるだらうか、國家の存亡に關する危險と比較すべきものでない。而して一國の國備は經濟發展を助長する間接の道具であることを忘れてはならない。又陸軍半減は國防力を蕩盡する樣な大問題だが、之に依りて得る所は民力休養に顯著なる効果ありとは思へない。抑々民力休養と國防問題とは必ずしも相關聯して論ずべきものではない。嘗て國際聯盟に於て英米は軍事費と國費とを比較して軍備の多寡を決せんとした。此の主張が通るならば伊太利は英米に比し國力貧弱であるから過大の軍備を推することになる。其所で伊太利委員は曰く、

一人一日の食糧は一定してゐる收入と比較すべきものではない。相當の程度迄は收入を食糧のために使用しなければならない。兵力は國家の存亡に關するものであつて個人の食糧に等しきものだ、國家又は個人が其生命維持のためには負債も必要である。凡てを犧牲としなければならぬ、然も伊太利は之がため決して衰弱しない

のである。

と、將さに我國の陸軍大縮論小者に對する頂門の一針だ。

二　國民の覺醒當起

我國は世界の外交舞臺に乘り出してから六十年餘に過ぎない。幾世紀となく國際競爭に揉まれ酸いも甘いも嘗めつくした海山千年の老狸國と太刀打の出來ないのは自然の勢だとは云へ外交に最も必要なるは雄勁の氣節と明晰なる判斷力である。日露戰爭前後の我外交は其の技術に於ては慣熟せずとも斯の氣節と判斷力とに富み、屢々國家の重大事に直面して外交上の好果を齎らした。恨むらくは其後の外交にこの氣節と判斷とがない。殊に大戰後の外交は讓歩を以て外交と爲し事毎に屈從する。讓歩せば協議は必ず纏まるに決つてゐる。讓歩の裡に平和ありとは外交界の現代思想だ。然し乍ら國家には生命問題があり面目問題がある。絶對讓歩し得ざる瀬戸際に至り執るべき手段は何であるか夫れは戰爭だ。朝に一事を夕に又一事を讓り讓歩屈從是れ事として讓る

べきものなき時代とならば戰ふべき力もなき亡國となるのだ。現に滿蒙問題丈けでも眼前に山積してゐるが、斷乎善處の道を開かず苟且偸安遲延日を曠ふするのが現在外交の通弊だ表面丈けで平和不戰を高唱すれば、蔭で赤い舌を出さうと、日本海軍に對する必勝的絶對優勢を獲得した抔と廣言しようとも我外交界の耳目には何等の感觸を與へず、却て外務當局をして武力時代は既に去つたと公言することに妄斷せしむる體たらくだ。言論界の論調も故意にあらざれば亦頗る單純であり馬鹿正直であり、歐米人が戰爭の爲め蔭で盛んに準備してゐても、口で平和不戰を絶叫すれば鸚鵡返しに平和不戰を高唱し、各國が軍縮に滋る現狀に頓着せず我國獨り大縮小を斷行すべしと論難する。此の如き現象の繼續は實に國家百年の一大不祥事である。國民の確かりせねばならぬのは今の時期だ。歐米人程國防の重大性を熟知尊重してゐる者はない。倫敦會議華府會議、華府會議は悉く之を露骨に表示してゐる。彼等には實利實益あつての國際正義である。苟くも不利益と見れば國際信義を無視する之に反し空論でも名目が立派で自己に益する所あれば反對しない、平和宣傳國際聯盟不戰條約は皆後者であり、

之に依て相手の軍備を縮小するの道具に使ふのだ。彼等に關する我國每度の外交失敗は前者に屬する。斯の如くマザマザ實證を見せ着けられても、我政界及言論界に於ては世界は平和なり軍備は過大なり縮小すべしと言ふのである。今や平和不戰軍縮は世界の流行語であるが、何れの國が口通りに眞面目の軍縮を實行したか、戰爭は無論戰爭のための戰爭ではなくて或る目的を達せんかための戰爭である。今日では其目的は所謂經濟戰の支持及其勝利のためと爲つて來た。今日の經濟戰が只經濟戰で終ると見るものあらば、そは今日の國際事情を辨へざるの甚しき者だ。經濟戰の背後には武方の背景が必要であることは前來叙述を盡くしてゐるが、此の背景なき外交を以て國民經濟の發展を國際場裏に解決せんとしても世界の現狀が之を許るさない。米國當局は既に露骨に之を發表して居り、又其平時養ふ所の兵力は主として海外に使用するものだと宣言してゐる。今日海洋を隔つる千里の外に兵を用ゐんとする彼等の準備は極東大陸の經濟戰に備ふるものでなくて何であらう。然るに日本の滿蒙に於ける經濟的地歩は我國民生活の確保より論ずるも又平和建設の使命より見るも退歩どころか益々進

歩擴大せしめねばならぬ。そこに少なくも米國の野望と相容れざるものがある。吾人が軍縮問題に深甚の注意を拂ふのは決して戰ふ爲めではない我外交をして決心の後方に鞏固の基礎を持たしめたい爲である。我四圍の現況は獨り米國の脅威のみならず北からは世界の赤化侵略を目的とする露國が迫つてゐる、剩へ接壤國支那は國際信義も條約尊重も正義も人道も一切御構ひなしの國である。斯の如き環境に處しながら我國の軍縮論者は戰爭は十年後にあるか百年後にあるか豫斷し得ない故に戰爭の爲めの常備軍は國家の施設として餘りに不經濟だから陸軍大縮小の必要ありと言ふ。之が果して眞面目の考へから出發してゐるだらうか、隣の米國では十年乃至二十年間戰爭皆無と謂ふ保證は出來ぬ。夫れ故二十年間の準備は即刻より始めなければならないと言つて居る。又露國陸相ウォシロフは、

英佛の地中海爭覇戰及日米間の太平洋問題の解決は第二の世界大戰に依らざるべからざる形勢である。如何に資本國家が平和を唱へても、吾人は近く戰爭の避くべからざるを知る。赤軍は單に國軍の骨幹たるに過ぎず、宜しく全國民を軍隊化するを

要す。

と宣言し、全國民の軍事教育を實施してゐる。就中倫敦會議に於ける米國の折衝及其後に於ける米國當局の言說は著しき刺戟を吾人の耳目に加へ、米支露三國今日迄の行爲の如何なるものであつたかは、今や全國民の齊しく熟知する所であらねばならぬ。即ち太平洋戰爭の脅威は歷々として吾人の眼前に展開してゐる。吾人は今日の軍縮論に相當の敬意を表し之を熟讀しても、遂に平和の永續する確證を發見するを得ないのである。否世界の現況の表裏を注視して、平和永續の根據として認め得るものなく、却つて戰爭勃發の動因山積するを看取するを悲む者である。吾人は論者の平和永續論がいかなる事實的根據に立脚するやを切に問はんと欲す。賢明なる我國民は冷靜熟慮以て紛々たる不自然の異說俗論を排すべく、斷乎として國家存亡の大事國家百年の大計を誤つてはならない。一步誤らば關東大震災以上の恐るべき天譴を受けねばなるまい。之を要するに四圍の狀勢は吾人に國防の暫くも忽にすべからざるを敎ふるや頗る痛切にして餘す所なし。故に吾人は敢て斷言す陸軍力又は陸軍費の縮小減額を論ず

るは萬古の日本を衰亡に導びく一種の亡國論であると。

之を要するに既往二回の陸軍々縮も其名は整理であつたが、其實軍事費の搾取であつた。若しも當時の整理計畫が眞に整理に立脚せるものならば今更第三回の整理問題が起る筈はないそこに大なる矛盾と無理がある。目下陸軍當局に於て研究詮議せられつゝある軍制整理案が前二回の轍を踏むが如き結果とならんが國家の前途は言語同斷である故に、吾人は不取敢刻下の要求として左記二大項目を提唱する。

一、陸軍々制整理は我陸軍の編制裝備を現代的に充實するに在る事

二、前號充實計畫は現有陸軍費の運用に依り實行せらるべき範圍を第一期とし其他は財政の狀況に基き實行すべき第二期の分として計畫する事

吾人は大分政界言論界に向つて小言を述べたのであるが、最後の責任は何と言つても吾人國民の負荷すべき問題である。願くば上下左右相共に覺醒奮起して國家の前途を開拓したい。國內に於ける同胞間の感情離反は大の禁物である筆勢語句の整はざるは著者の萬謝する所切に讀者の寬容を仰ぐ。

國民必讀

極東平和と日本陸軍 終

昭和六年一月

帝國及列強ノ陸軍々費ニ關スル參考表

區別	國名	露國	伊國	佛國	獨國	日本	英國	米國
國富ニ對シ	軍事費 比率	1/89	1/80	1/90	1/202	1/231	1/215	1/473
	軍事費 順位	二	一	三	四	六	五	七
國民所得ニ對シ	陸軍費 比率	1/111	1/125	1/151	1/284	1/534	1/488	1/894
	陸軍費 順位	一	二	三	四	六	五	七
一人當リノ比率	軍事費 比率	1/18	1/18	1/19	1/70	1/29	1/39	1/77
	軍事費 順位	一	二	三	六	四	五	七
	陸軍費 比率	1/21	1/29	1/33	1/99	1/67	1/90	1/178
	陸軍費 順位	一	二	三	六	四	五	七
國民一人ノ負擔額	軍事費 負擔額	7.90	14.00	28.02	5.50	7.16	23.91	13.42
	軍事費 順位	五	三	一	七	六	二	四
	陸軍費 負擔額	6.80	8.94	16.37	4.01	3.24	10.74	9.39
	陸軍費 順位	五	四	一	六	七	二	三
總豫算ニ對スル比率	軍事費	10.1%	28.2%	23.1%	5.9%	純計陸軍費ニ對シ 11.9% 一般會計ニ對シ 28.7%	13.9%	17.1%
	陸軍費	(8.8%)	18.0%	13.9%	4.2%	純計陸軍費ニ對シ 5.4% 一般會計ニ對シ 12.9%	6.3%	9.4%
國富		1,041億圓02	447億圓38	1,035億圓20	716億圓85	1,023億圓42	2,363億圓30	7,623億圓56
國民所得		207億圓33	103億圓52	219億圓07	249億圓87	128億圓93	438億圓31	1,425億圓18
軍費總額		113億圓90	19億圓85	49億圓84	60億圓40	純計陸軍費 37億圓29 一般會計 15億圓51	78億圓94	94億圓21
軍事費		11億圓59	5億圓60	11億圓49	3億圓55	4億圓44	11億圓00	16億圓10
陸軍費		(約10億圓00)	3億圓58	6億圓92	2億圓57	2億圓01	4億圓94	8億圓87

備考

一、國富及國民所得ハ內閣統計局ノ調査ニヨル
二、國費、軍事費、陸軍費ハ一九三〇—三一年度(露ハ一九—三〇年度)ノモノトス
三、英國、佛國、伊國ノ陸軍費中ニハ空軍費ノ半額ヲ含ミ其他ノ諸國ノ陸軍費中ニハ陸軍航空費ヲ含ム
四、米國ノ陸軍費中ニハ諸國軍費ニ關シタハ其約半額(別組裝備費)ノミヲ含ミ、伊國ノ陸軍費中ニハ國境警備費ヲ含ム
五、外國貨幣ノ邦貨換算率ハ(露ニ約十圓、佛ニ約二圓、伊ニ約十錢、獨ニ約五十錢、墨ニ約十錢、英ニ約十錢、金貨ニ約一圓)ニ依ル
六、尙ホ參考ノ爲ノ各國陸軍平時兵力(人口ニ對スル比率ヲ示セハ(比率大ナル方ヨリ)佛國1/70、伊國1/103、英國1/129、露國1/138、獨國1/255、日本1/270、米國1/397トナル
七、昭和五年度純計豫算ハ議會解散ノ爲成立セナリシモノ及本表ニハ大藏省調査ノ非公式ノモノヲ掲ケタリ

帝國及列國ニ於ケル大戰前ト現在トノ陸軍費ノ比較

國名	戰前(一九一二年度)一人當リ	現在一人當リ
佛國	九億法九四	六九億法一八
伊國	五億利六四	三五億利七六
米國	二億弗〇〇	四億弗四三
英國	〇億磅二八	〇億磅四九
日本	〇億圓九九(大正七年度一九一二年度一)	二億圓〇一
	二億圓六三(大正十年度一九二一年度一)	

佛伊兩國ノ現在ノ陸軍費ガ著シク膨脹シタルハ通貨ノ下落ニ因ルモノニシテ實價ニ於テハ現在ハ戰前ノ二倍ト認ム

露國ニ於ケル戰前及最近數年間ノ軍事費一覽

年度	軍事費	摘要
戰前(一九一二年度)	七億圓〇二	
一九二五年度	四億圓一〇	
一九二六年度	六億圓三五	
一九二七年度	七億圓八〇	
一九二八年度	九億圓七九	陸軍費ハ軍事費ノ約九割トス
一九二九年度	一一億圓五九	

我陸軍費ト國費(純計豫算)トノ比較(最近十年間ニ於ケル)

年度	國費(純計豫算)	陸軍費	陸軍費ハ國費ニ對スル割
大正十年度	三三億圓三一	二億圓六三	〇・七九
同十一年度	三二億圓五九	二億圓五三	〇・七八
同十二年度	三〇億圓三三	二億圓〇四	〇・六七
同十三年度	—	—	—
同十四年度	三四億圓〇三	一億圓九二	〇・五六
同十五年度	三三億圓八八	二億圓〇〇	〇・五九
昭和二年度	三六億圓三一	二億圓一二	〇・五八
同三年度	—	二億圓二五	—
同四年度	三八億圓一〇	二億圓三二	〇・六一
同五年度	(三七億圓二九)	二億圓〇一	〇・五四

昭和六年一月十六日印刷
昭和六年一月廿一日發行

定價金五十錢

極東平和と日本陸軍

著作者　恢弘會
代表者　瀬部和三郎
東京市麹町區元園町一丁目七番地

發行者　鎌田眞一郎
東京市神田區三崎町三丁目百廿七番地

印刷者　鹽野太代吉

發行所　東京市麹町區元園町一丁目七番地　兵林館
電話九段二五一五番
振替東京四九三六番

（印刷所　兵林館印刷部）

不許複製

名實共に模範的なる
五連發『模範教練銃』を推奬す

空包狹窄射擊用單發一挺
（甲）七圓八十錢
（特）九圓八十錢
空包狹窄射擊用五連發一挺
（特上）十三圓八十錢

右三種共三八式歩兵銃ト同似ノ形狀構造機關ヲ有シ定價ハ眞銃ノ三分一ニ過ギズ而モ命中正確構造堅牢也

教練用　一挺
（第一種甲）四圓
（昭和式甲）四圓八拾錢

右二種共三八式歩兵銃ト同形同大、搠杖頭、照尺、照星、引金、用心鐵、遊底、遊底覆、上下帶、床尾鈑、負革ヲ附ス弊館特製紙彈（五十發二十錢）ニテ空包同樣ノ音響ヲ發ス。

教練用品目錄
無代進呈

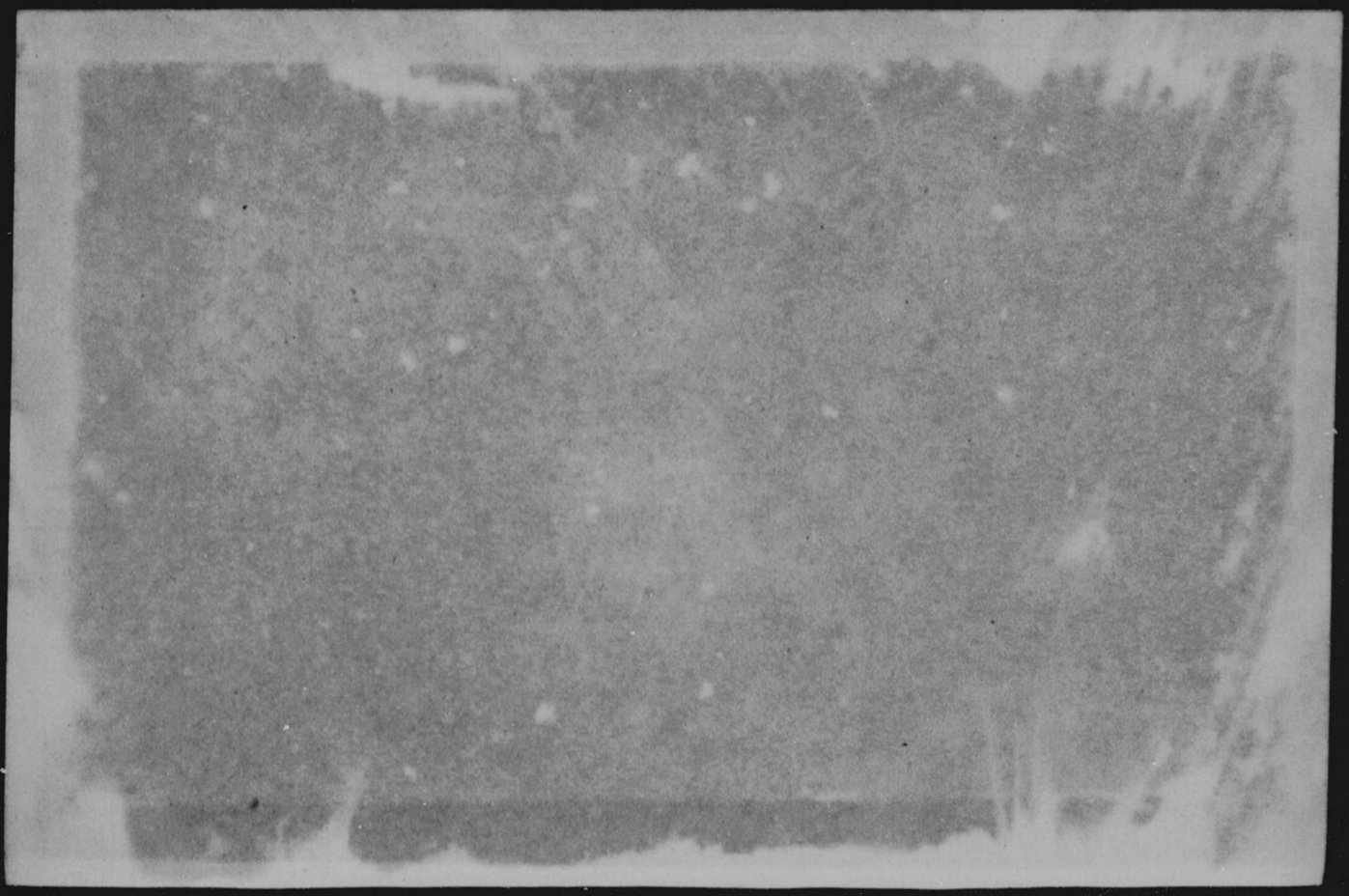
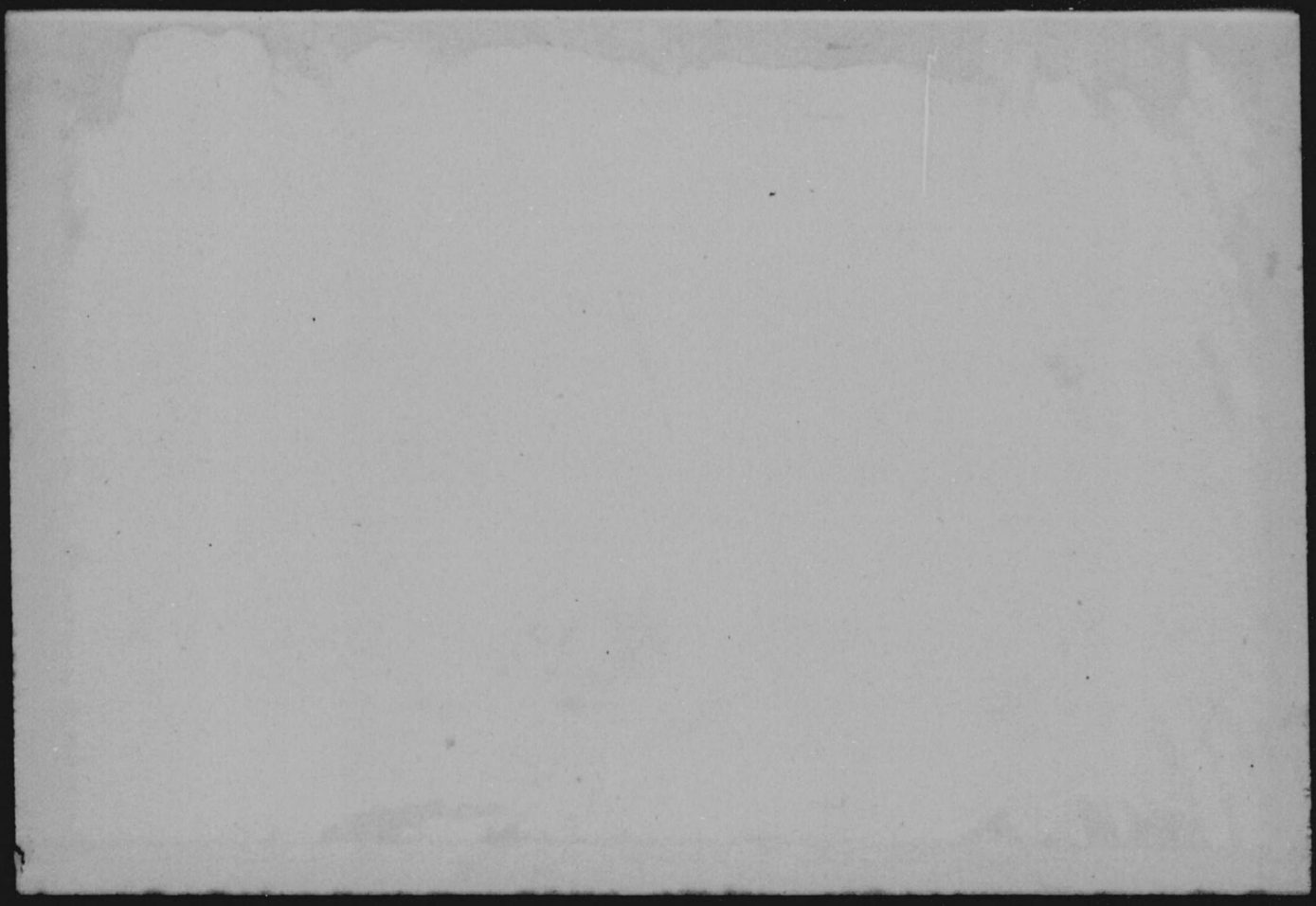
天覽台覽

一戸大將閣下題字（木銘 被部刻）等々力中將閣下推奬

青年訓練所 學校用 模範教練銃

銃劍	甲	八、〇〇
劍差	乙	五、〇〇
藥盒二、帶革一組	特上	四圓貳拾錢
	特	參圓五拾錢
	乙	貳圓五拾錢
背嚢（陸軍制品式ト同形同大）		三、八〇
甲革製		一、九〇
乙ヅック製		一、六〇
【圓五拾錢】參圓		
推	甲	五、八〇
抑	乙	八、〇〇
刀		
刀	甲	三、〇〇
生徒用帶	乙	一、〇〇
喇叭緒	甲	七、五〇
刀	乙	六、三〇
飯盒	甲（二〇匁付）	一、三〇
	乙（九〇匁付）	一、〇〇
水筒	甲	一、四〇
	乙	一、〇〇
雜嚢	甲	一、三〇
	乙	〇、七〇
天幕	甲	八、〇〇
	乙	五、〇〇
	丙	三、六〇

東京元園町一丁目麹町區

兵林館

振替東京四九三六番
電話九段二五一五番